

「Huruma will supply food directly to the target villages in Sudan. We will study the logistics to deliver them safely. Therefore, we will stay here for the investigation of poor villages until we recognize the actual situation.」(フルマはスーダンの目的の村に直接食料を供給します。我々は食料を安全に配送する手段を研究します。だから、我々は実態を認識できるまで、貧困な村を調査するために、ここに滞在します)ネルビは安心した。祐子は自分に対して極秘であるはずのJ JWAの意図を明かしてくれたネルビのことが心配になった。

「Mom, Did you make her to bring back to life?」(ママ、あなたが彼女を生き返らせたのですか?)

「No, I didn't. She was still alive at that moment. Miss Aki guided her to be aware of conscious.」(いいえ、あの時、彼女はまだ生きていました。亜紀さんが彼女に意識を気づかせたのです)

「You are both the unbelievable women.」(おふたりは驚くべき女性です)

祐子達を護衛していたジミーとメドリスナは、ラグマでの祐子と亜希子の一連の奇跡的な行いを目の当たりにし、自分たちの責任の重さを改めて痛感したようであった。ふたりは祐子がクツの首長を訪問したとき、祐子を救出するために首長の家に向けて出陣したことがある。そのとき、空中に浮いた祐子の姿を見て、地にひれ伏したことを思い出していた。このふたりのことを真の女神だと信じていた。祐子達が貧困者の家を訪問するたびにふたりは家の中まで同行しようとしたが、祐子がそれを押し留めていた。彼らは家の入り口に立って、祐子達を護った。ふたりとも常に無言だった。

ラグマを引き上げる時、祐子がふたりに向かって言った。

「Asante sana.」(どうもありがとう)

亜希子も言った。

「Asante sana.」(どうもありがとうございます)

男達は微笑んだ。それが喜びを伴っていることを、ふたりの女性はすぐに感じ取った。ジープはジミーが運転することになった。祐子と亜希子

がジープに乗り込むと、ジミーはネルビの車の後を追尾した。ハルツームまでは1時間以上掛かった。既に陽は落ち掛けていて、辺りは次第に薄暗い帷に包まれてきた。土塀の家々の脇を通り過ぎる時は、メドリスナは一層警戒心を強く働かせていた。無事ハルツームの市街に入ると、見たこともない形の建物がちらほら見える。今朝の兵舎周辺の様子からは想像もできない様な光景だった。灯りに浮き上がっている看板の中には、中国語も伺えた。ホテルは一流ホテルとのことだった。一流とは言ってもアフリカでのこと、自ずとその設備などが想像される。ホテルのエントランスに着くと、ネルビは翌朝迎えに来ると言って去って行った。「由宇お姉様、このような立派なホテルは久しぶりです。何となくわくわくしますわ」

「そうね。私も久しぶりだわ。だけど、ここは JJWA の案内で貧困村を訪問する2日間だけよ。JJWA が費用を持つからね」

「その後はどうなるのですか？」

「訪問する村に泊めてもらうわ。実際にその場所に居ないと実体が掴めないから」

「お姉様、分かっています。覚悟は決めています。ところで、男性2人はどうするのかしら？」

「この人達もこのホテルに宿泊するわ。JJWA にそういう条件を出したのよ。彼ら、了解したわ」

車を駐車場に停めると、ジミーとメドリスナは4人分の宿泊用の荷物を軽々と持ってエントランスを入った。ふたりの男性の小銃は手持ちのバッグに押し込んである。祐子は先ず自分達がチェックインし、ふたりの男性がチェックインするのを助けた。部屋はダブルベッド・ルームの2部屋で、隣同士にしてもらった。4階の415号と416号の部屋が割り当てられた。祐子はジミーとメドリスナに部屋の前に立つ警護は他の客に恐怖心を与えるので、緊急時のみの対応をしてほしいと頼んだ。兵士達はなかなか納得しなかったが、外出時には必ず同行することと、30分ごとに巡回をするということで、漸く妥協した。この街には沢山の中国人が住んでいるということを鹿島から聞いていたので、祐子は亜希

子に中華料理を食べに出ようと言った。

「由宇お姉様、素敵ですわ。ホテルの外に出るのでしょうか？」

「そうよ。ジミーとメドリスナにも一緒に食事してもらいましょう」

亜希子は早速、隣の部屋に電話を掛けた。ジミーが出た。

「Hello!」(もしもし)

「Jimmy, 10 dakika Baadaye, sisi kwenda nje kwa chakula cha jioni.」

(ジミー、10分後に、私たち食事に出るわ)

「Mimi kuelewa. Sisi kufuata sasa.」(わかりました。すぐにご一緒します)

祐子と亜希子がドアを開けると、既に2人が小銃の袋を持って立っていた。祐子と言った。

「Tuende mgahawa Kichina.」(中華料理店に行きましょう)

2人の兵士は黙って頷いた。ジミーの運転だった。

ハルトゥームの繁華街は思いのほか近代化されていて、亜希子には、こんな都会のすぐ近くで、今日食べるものもなく苦しんでいる人たちがいる事実を、実感として思い描けなかった。祐子は現実の姿を、思考の外側に出て見つめていた。中華料理店の建物とその周囲を囲む塀は赤を基調にした装飾が施されていて、一見して派手な印象を受けるレストランだった。特に駐車場などは無く、手前の広い敷地に駐車して、4人は歩いてレストランに向かった。入り口を入ると、案内係がやって来た。ジミーとメドリスナは入口に立ったまま奥に入って行こうとしない。祐子と言った。

「\*\*\*\*\*」(一緒に食事をしましょう)

ジミーが答えた。

「\*\*\*\*\*」(我々は護衛です。それはできません)

祐子は優しくな目で、2人に言った。

「\*\*\*\*\*」(食事中が危ないんですよ。だから、食事をいっしょにしてください)

「\*\*\*\*\*」(申し訳ありませんでした。ご一緒します)

ジミーが答えて、女性たちの後に従った。テーブルに着いて食事をして

いる客たちが、一見して物々しさを感じさせる4人に視線を投げ掛けてくる。案内係に促されて、祐子と亜希子が奥にある円形のテーブルに着いたが、2人の兵士は小銃の袋を持ったまま、突っ立っていた。

「\*\*\*\*\*」（貴方達も座ってちょうだい）

祐子の声で2人は、遠慮がちに席に着いた。テーブルは6人掛けで、祐子と亜希子は隣同士、その両脇に1席ずつ空けてジミーとメドリスナが座った。

「亜紀、何が食べたい？」

「わたくし、久しぶりにチャーハンを頂きたいです」

「\*\*\*\*\*」（ジミー、メドリスナあなたがたは？何が好き？）

「\*\*\*\*\*」（ママ、われわれは中国の料理は食べたことがありますから、わかりません）

「\*\*\*\*\*」（ごめんなさいね。じゃ、私が選ぶわね）

ウェイターがすぐにお茶を4人分持って来た。祐子が卵スープと回鍋肉（ホイコウロウ）、青椒肉絲（チンジャオロウス）、炒飯、春巻をそれぞれ4人前頼んだ。暫くして、ウェイターが次々に料理を持って来た。祐子と亜希子はその量の多さに驚いた。とても4人では食べられそうにないと思った。2人の兵士は緊張して、顔が引きつっている。亜希子は席を立つと、2人の兵士の近くに行き、取り皿に料理を一通り取ってあげた。2人は姿勢を正したまま、動かない。亜希子が席に戻ると祐子がスワヒリ語で言った。

「\*\*\*\*\*」（さあ、いただきます。ジミー、メドリスナ、ご苦労様でした。ゆっくり食べてください。それでは始めましょう）

祐子と亜希子が食事を始めると、少しして、2人の兵士も亜希子の取ってくれた料理を食べ始めた。しかし、プラスチックの箸がうまく使えないようで、料理は口元で直ぐに皿に滑り落ちてしまった。祐子はウェイターを呼んで、フォークを持って来てもらった。フォークを手にするのと、途端に2人の兵士は勢いよく食べ始めた。初めは警戒しながら食べているようだったが、少し食べると、味が気に入ったようで、あっという間に亜希子の盛ってあげた料理を平らげてしまった。

その時、左手の奥の方で「ガチャ」という大きな音がした。2人の兵士がさっと立ち上り、いつの間にか小銃を袋から出し、両足を広げて中腰になり、銃を構えた。それを見た周辺の席の客が一斉にテーブルの下に潜り込んだ。ウェイターが跳んで来て、頭をペコペコ下げながら銃を構えている兵士たちに言った。

「I'm so sorry. The kitchen staff fell dishes onto the floor.」（すみませんでした。厨房で皿を落としてしまいました・・・）

ウェイターは周りの客たちにも謝っていた。祐子は、この程度の音はいくつかの中華料理店で耳にしたことがあったが、そんな音にこれほど敏感に反応した客を見たことは無かった。周囲の客は2人の兵士の小銃に恐怖心を抱いたことが一目瞭然だった。祐子が手で席に着くように促すと、2人の兵士はまた銃を袋に仕舞い、何事も無かったかのように着席した。それからは周囲の席の客たちが、祐子たちの席を意識し始めたようだった。食事をしながらも、ちらりちらりと4人の席を窺っていた。祐子と亜希子はすぐに満腹になってしまった。祐子が2人の兵士に、遠慮せずに食べるように言うと、2人は、ピッチを上げてすべての料理をきれいに食べ尽くしてしまった。亜希子は祐子の顔を見てほほ笑んだ。祐子も軽く会釈した。

祐子と亜希子は2人の兵士に守られて、ホテルの部屋に戻った。

「由宇お姉様、とても楽しいお食事でした。アトラクションもあって…」

「アトラクション？・・・そうね。でも、彼らは真剣だったのよ」

「はい、とても頼もしく感じました。それにしてもあのメドリスナの食べぶりはたいしたものですよ。あっという間にみんな平らげてしまったでしょう」

「本当ね。あの人たちに守られて、私たちは幸せね」

「はい。でも、本当はあの方に守っていただきたいわ」

「あのひとは私たちを守っているわ。私たちにはわからないけど、あのひとは自然そのものなのよ。何時も私たち2人の周りに居るわ」

「でも、お会いしたいです」

祐子と亜希子は貧困に喘いでいる村に、J JWAの仲介無しに安全に食

料や物資を送り届ける方法について話し合った。

「由宇お姉様、確かあのひとが、物質転送機とか云う装置の話をなさっていませんか？」

「ええ、言っていたわ。何でも、物質を遠隔地に転送する装置で、原さんがそれを発明して、発売したところだって。これからその機械を販売するために全力を投入するって・・・」

「おねえさま、その装置が利用できないかしら？」

「そうね、あのひとにもっと詳しく聞いてみようかしら」

「そうしましょう。今日もテレパシーでお話ししましょう」

亜希子は物質転送機のことより、賢と意識を通わせたいようだった。亜希子は賢の意識が常に祐子に向いているだろうと思っていたが、自分からも直接コンタクトを取ってみたいくなった。

「お姉様、今日はわたくしがあのひとにコンタクトしてもいいかしら？」

「勿論よ。あのひとはいつも私たちふたりに意識を向けているわ。試してごらんなさい」

亜希子はすぐに瞑想状態になり、賢に向けて意識を投げ掛けた。

「あなた、わたくし亜紀です。わかりますか？お話ししてもいいですか？」

賢はまだ朝の深い眠りの中にあっただ。亜希子の姿が見えた。微笑みながら話し掛けている。賢も嬉しくなった。

「どうした、亜紀、何かあったのか？」

「はい、少し相談したいことがあるの。あなた、物質転送機という機械を販売し始めたっておっしゃっていたでしょう？そのことなのですか・・・」

「物質転送機がどうかしたのか？」

亜希子はキガリのフルマからスーダンの貧しい人々の住む村々に支援物資を配送したいと言った。そして、その配送に物質転送機が使えないかと訊いた。賢は眠りから覚めて、意識を明確にし、亜希子に応えた。

「亜希子、それは素晴らしい考えだ。だけど、どうして通常の輸送手段じゃまずいんだ？そんなに緊急なことなのか？」

「はい、貧しい人たちはもう、ずっと苦しんでいます。こうしている間にも、食べるものがなくて、亡くなって逝かれる人たちがいらっしゃるのです。ですから、早ければ早いほど良いのです。フルマのことは由宇お姉様にご説明されると思います。由宇お姉様に交代します」

「あなた、私です。祐子です。亜紀から聞いたと思いますが、あなたの物質転送機は、アフリカでも使えるのですか？アフリカのキガリからスーダンの貧困村に支援物資を送りたいのです。普通の輸送方法や、政府などの機関を仲介させた物資の供給だと、本当に苦しんでいる人たちのところに品物が届かない危険性が高いから、村まで直接送りたいのです。それと、スーダンは内紛が続いている国ですから、普通の配送ではいつ略奪されるか分かりません。できるだけ、人目に付かないように配送したいのです。物質転送機なら、それが可能じゃないかと思ったのですが、もし、可能なら、1台貸してくれないかしら？」

「それは素晴らしいことだ。すぐにマシンを1台用意するよ。だが、問題は設置環境と運用方法だ。祐子、そのことをよく検討しろよ。何しろ突然品物が目の前に顕れるんだから、それを目の当たりにした者は打ち出の小槌みたいに感じるだろう。その不思議なマシンの存在が知れ渡ったら、どんなことが起きるか知れない。新たな紛争の火種にもなりかねないからな。きっと魔法のランプの類に思われるだろう・・・」

「その点は、何とかするわ。信用できる人間を常時そのマシンの近くに配備しておくわ。それと、カモフラージュも考えるわ」

「よし、分かった。それじゃ、設置と運用方法は任せるぞ。用意ができたら俺がマシンを持って、テレポーションする。君たちがキガリに戻ってからだな。もう一つ大切なことがある。それは位置情報システムだ。マシンを設置する場所と、品物を転送する拠点を予め正確に決めなくてはならないんだ。物質を転送するためには、転送しようとする場所の正確な3次元的位置情報が必要になる。日本の国内には、衛星と地上局を使って現在位置を正確に認識できる仕組みができているから、位置情報検出装置の示す場所に対してなら、どこにでも物質転送できるが、

アフリカのあの地域には通信・放送用の衛星しかないから、地図などの情報から位置情報を正確に算出して、その位置情報を予め決めた固定的なものとして設定せざるを得ない。運用の前に事前に、品物を発送する場所の正確な3次元位置情報を、マシンに入力しなくてはならないんだ。位置、つまり、緯度と経度、それに海拔標高などの正確な値だ。そして、その位置情報が正しいかどうか確認するために、マシンを設置した後で、そこに向けて試験的に品物を転送してみる必要がある。少しややこしいが分かるか？」

「あなたの、そんなお話は久しぶりに伺いました。驚きました。あなた自身も意図的にテレポーションできるようになったんですね。そのことだけでも、言葉を失ってしまいます。今の物質転送機のお話、雰囲気は分かりましたが、私の理解が正しいかどうか分かりません。あなたが、マシンを持って来てくださるときに、もう少し詳しくお話ししてくださいますか？」

「分かった。ところで、貧困の村はそんなに沢山あるのか？」

「まだ、実体は分かりません。これから調べるところです。でも、この国の政府や、関係機関が黙って調査を許すかどうか、そこが難しいところですよ」

「祐子、君たちふたりは女性だから、本当に注意しろよ。一旦標的にされたら、ひとたまりもないぞ」

「あなた、大丈夫よ。ふたりの勇猛な兵士が私たちを護衛してくれるから」

「でも、本当に気を付けろよ」

「分かったわ」

翌朝も空は真っ青に晴れ渡り、また暑くなりそうな予感をふたりに感じさせた。北側に向いた窓からは遠くに二つの河の合流点が見える。ホワイトナイルとブルーナイルだ。ハルツーム地区でブルーナイルが大きく湾曲し、その部分に出来たタブ島という半月型の中州が一つの街になっていて、まるで流れを遮るかのように川の中に存在している。そのブルーナイルに対して、ホワイトナイルが急に川幅を狭めて遠慮がちに合流



している。この国で、かの悪名高いジェノサイドが現実に行われていることが、亜希子には信じられなかった。

ふたりが身支度を調べ、荷物をまとめて部屋を出ると、そこには既に小銃の入った袋を手にしたふたりの兵士の姿があった。ふたりともチェックアウトの準備が出来ているようだった。

「Good morning, Ma'am.」（おはようございます奥様）

「Good morning, Jimmy 'n Medrisuna.」（おはよう、ジミー、メドリスナ）

「Good morning.」（おはようございます）

亜希子の微笑みかける挨拶に続いて、祐子が聞いた。

「Did you take breakfast?」（朝食を摂ったの？）

「Yes we did, Mama.」（はい、ママ）

荷物をレストランの入り口の荷物置き場に置き、バイキング形式のレストランで朝食を済ました。ふたりの兵士はレストランの入り口で待っていた。食事を済ませると、4人はすぐにチェックアウトをした。支払いはJ JWAにチャージされると、フロントレディが言った。祐子達がロビーのソファで休息していると、エントランスからネルビが入って来て、ソファに近付き、頭を下げた。

「Good morning Mama, miss Aki.」（おはようございます。ママ、亜紀様）

「Good morning Nerubi.」（おはようございます、ネルビさん）

「Good morning. Shall we go.」（おはようございます。さあ出掛けましょう）

祐子がすぐに立ち上がろうとすると、ネルビが小声で言った。

「Today, I will take you to Dalful area. I'm sure you couldn't bear to see their miserable state. After we arrive at the east end village in Dalful, I have to come back here as soon as possible. I'm sorry I couldn't guide you in their villages.」（今日は、ダルフル地域までお連れいたします。きっと、彼らの惨状は見るに忍びないことでしょう。ダルフルの東端の村まで着いたら、私は急いで戻って来なくてはなり

ません。彼らの村をガイドできなくて済みません)

祐子は、これがネルビにできる限界だと思った。この行為だけでも、彼の身に危険が及ぶ可能性が高いことを祐子は察した。昨日の朝とは打って変わり、ネルビは常にふたりの女性に気を遣いながら自分の車に向かった。ホテルから出ると、外の空気は既に熱気を含んでいる。7時少し過ぎだ。この日はメドリスナの運転だった。ジミーがふたりを護衛し、メドリスナがホテルの駐車場に車を取りに行った。朝から風が強い。時々さっと吹き抜ける風も、少しも涼しさを与えてくれない。メドリスナが車を横付けし、後部座席の扉を開けてくれた。ジミーは警戒を疎かにしない。ふたりが車に乗り込むまで周囲を警戒していて、最後に助手席に乗り込んだ。ジミーがドアを閉めるとネルビはすぐに車を発車させた。メドリスナも遅れずにその後に従った。ネルビは先ず、ガソリンスタンドに寄った。2台の車は長距離走行のできる状態になった。ガソリンスタンドを出るとホワイトナイルに沿ってクスティまで国道を南下した。クスティには11時前に着いた。街を抜けると道は東西に走る国道にぶつかった。そこでネルビはハンドルを右に切った。ホワイトナイルを渡ると、河の西にある街を通り貫け、また国道B26号線にぶつかった。そこを左に曲がるとそこからは一本道だった。山肌に沿って道を疾駆する。強い風にあおられて砂が舞い散り、スモッグの様である。

「この砂は、死の砂よ。静まるまで人は外に出られないわ。今日はまだそれほどでもないけど、ひどいときは、生き物の息の根を止めるとまで言われているわ」

地図を片手にして位置を確認していた祐子が、頭を上げ、窓の外を見て、亜希子に言った。そんな強風にもかかわらずネルビはひた走った。メドリスナも必死に後を追尾した。昼食の為の停車も無かった。4人は車の中で乾パンを食べ、ペットボトルの水を飲んだ。気温の所為か、「用を足したい」と言う者もない。オベイドを通り過ぎ、ナフドの街に入る頃には陽も沈み、薄暗くなってきた。風が収まってきたので、運転者は胸を撫で下ろした。それから30分ほど走り、小さな街まで来てやっと、ネルビは車を道路脇に停めて降りて来た。時速100キロ近いスピード

で追尾し続けたメドリスナだが、ネルビが車から降りたのを見ると、疲れた様子も見せずに自分も車から降りた。ネルビがメドリスナの後に附いてやって来た。祐子が窓を開けると、ネルビが言った。

「This is the village of Dam Gamad around the east end of Darful. Today, you may stay here. I will bring you one hotel and ask the hotel people for one night. Tomorrow morning please ask the people there the way to the village damaged.」(ここは ダム・ガマドというダルフルの東端辺りの村です。今日は、ここに滞在できます。1軒のホテルにお連れして、ホテルの人に一晚の宿泊をお願いします。明日は、その人に被害を受けた村への道を尋ねてください)

全員車に戻ると、ネルビはそこから右手の細い道に入って行った。メドリスナも後に続いた。道の両脇には土塀の家々が見える。殆ど灯りは見えない。やがて他の家々の倍ほどの大きさで、コンクリートの囲いのある一軒の家の前に車を停めた。ネルビはその家の中に入って行った。4人は車の中で待った。少しすると、ネルビが出て来て、右手を挙げた。祐子と亜希子は車から降りようとしたが、足が痺れたようになっていた。足を擦ってやっとの思いで、降りることができた。荷物はジミーとメドリスナが持った。ネルビが4人を連れて中に入ると、宿の主と思われる黒人の男が、料金の前払いを要求した。祐子が支払いをした。ネルビはそこで帰ると言った。それに応えて祐子が言った。

「Thank you so much. We will work hard to help the poor people and the refugees.」(ありがとうございます。我々は貧困な人々と避難民の方々を救うために一生懸命働きます)

ネルビが車に戻って行くと、4人は宿の主に案内されて一つの部屋に入った。そこには曲がりなりにも電灯が点いていた。土の床に厚手の布が敷いてあるだけの部屋だ。他には何も無い。ジミーが食料と寝袋を取りに車に戻った。祐子は尿意を催した。亜希子も小声で祐子に尿意を伝えた。ホテルとは謂ってもトイレも無い。家主に尋ねると、さも当然と言わんばかりに、外の小屋でするように言って、ふたりを導いて外に出た。メドリスナもその後を追った。小屋は少し離れたところにあった。外は

意外に冷え込んできていた。星が美しい。時々流れ星が落ちて来る。月の光が無いので、全くの暗闇だった。その闇の中を3人で小屋に向かった。初めに亜希子、次に祐子が用足しをした。メドリスナはじっと待っていた。二人が用を済ませ、部屋に戻ると、ジミーが荷物を抱えて入って来た。それと立ち替わりにメドリスナが急いで外に出て行った。トイレを我慢していたようだ。ジミーは既に済ませていた。メドリスナが戻ると、4人は簡単な食事をした。パンと、スープと野菜の缶詰を開けた。4人は空腹だった。

「Thank you very much Medrisuna 'n Jimmy.」（メドリスナとジミーありがとう）

祐子が英語で言ったのを、ふたりはおかしく思ったようで、珍しく二人の顔に笑顔が浮かんだ。食事を済ますと、ふたりは寝袋に潜り込んだ。メドリスナはその場にごろっと横になった。ジミーは小銃を手にして壁に寄り掛かったまま起きていた。途中で交代することになっているはずだった。亜希子が小声で言った。

「由宇お姉様、なんだか楽しいですね」

「亜紀、あなた、何でも楽しいのね」

「由宇お姉様と一緒にだから、本当に楽しいの。寝袋で休むのは初めてのことですし。こんな風に芋虫みたいに転がっているのって、とても愉快でしょう」

「ライオンや豹が来たら、簡単に食べられちゃうわね」

「お姉様、脅かさないでください」

そう言うと亜希子は寝袋の身体をくねらせて、祐子の方ににじり寄った。翌朝はパンとオレンジジュースとソーセージの缶詰を開けて食べた。シンクなどの設備は何も無いのでふたりの女性は濡れナプキンで顔の表面を整えるのが精一杯だった。祐子は起き出して、宿の主を捜した。主はどこに居るのか分からなかったが、暫くすると何食わぬ顔をして入り口から入って来た。どうやら、この建物はホテル専用で、宿の主は別の家で寝起きしているようだった。

「Good morning, Ma'am.」（奥様、おはようございます）

「Good morning. May I ask something?」（おはようございます。ちょっと訪ねたいんですが）

「Sure, you could.」（何なりと）

「We came here to visit the difficult villages which have been suffering from the combat. Please tell us how to get there.」（我々は戦闘に苦しんできて、困窮している村々を訪問するためにここに来ました。そこにどう行けばいいか教えてください）

腰がやや曲がった感じのする宿の主は、目を壁に据えたまま、じっとして考えていたが、やがて口を開いた。

「I will just tell you the way to the place. However, do not ask me any other things about the combat, OK?」（その場所への道を教えることだけはします。でも、それ以外の戦闘に関することは聞かないでください。いいですね?）

「Thank you very much. That's enough for us.」（ありがとうございます。それで十分です）

それはこの宿からそれほど離れた所ではなかった。村を出て、熱帯植物の茂るサバンナの凸凹道を30分ほど走ると、前方がぱっと開けた。人々の生活していたような雰囲気を感じる。しかし、構造物は何もない。転々と直径5、6メートルの丸い形に土が削られていて、その丸の中に柱の跡の様な穴が明いている。まるで、地中に埋もれた遺跡が雨や風で地表が削られ、覆われていた土の下から姿を現したような印象を受ける。ここには村があったであろうことが容易に察せられた。亜希子は頭が割れるように痛くなってきた。苦しみ悲しむ人々の叫びが頭の中に鳴り響く。少し行くと、井戸跡の様な、石で囲まれた水場があったが、そこには牛馬の糞が詰め込まれていて、明らかに、意図的に水源を埋めたことが判る。さらに少し進むと、木製の真新しい立て札が目についた。何らかの注意書きかと思い、祐子はメドリスナに車を停めるように言った。メドリスナは、車中から文字が読み取れる位置まで車を進めた。それは太く赤いインクで書かれていた。

「DIRTY JJWA! DEVIL, FALL INTO HELL! You killed everybody.

**You plundered everything from us.**」(汚い J J W A め！悪魔め！地獄に墮ちろ！お前達はみんなを殺した。お前達は我々から全てを奪った) 祐子は、ホテル代の支払いを J J W A に委ねたことを悔やんだ。その時横の草むらから、いきなりひとりの 13、4 歳の少年が飛び出して来て、両手を広げて車の前に立ちはだかった。ジミーは小銃を構えた。メドリスナも車を止めるとすぐに小銃を手にした。少年が叫んだ。

**「Who are you? You are not JJWA, are you? What are you doing here?」**(お前達はだれだ？ J J W A じゃないようだな？ここで何をしている？)

祐子が応えた。

**「We came here from Rwanda to help suffering people from poverty.」**

(我々はルワンダから貧困に苦しむ人々を救うためにやって来た)

**「Speak the truth!」**(本当のことを言え！)

祐子は全く同じ言葉を繰り返した。少年は両手を下げて道の脇に避けた。祐子は車から降りて、少年の方に向かった。ジミーがあわてて小銃を手にして跡を追った。少年に近付くと、祐子は少年の両肩に手を掛けて言った。

**「You have held up through all sorts of difficulties. We will support you as long as we can. Don't mind to live in this world, my promising son.」**(あなたはあらゆる困難に耐えてきたのね。私たちはできる限りあなたをサポートするわ。この世界に住むのに心配はいらないのよ、私の頼もしい息子よ！)

祐子からは黄金の光が輝き、少年を覆った。少年は初め驚いて後ずさりしたが、祐子の光の波に心を奪われ、呆然と立ちつくした。目から涙がぼたぼたと落ちた。

**「I know everything. Take me to your countrymen. I will encourage and help them.」**(私は全てを知っているのです。私をあなたの同胞の所に連れて行きなさい。私が彼らを励まし、助けましょう)

少年は祐子に促されてジープに乗り込んだ。祐子と亜希子の間で、J J W A が村の人々を皆殺した時のことを話し始めた。それは残酷な地獄絵

だった。

「In the early morning, they came to my village by the helicopter. They bombed on our houses and shot the people working all around my village. After the attack by the helicopter, JJWA came on horsebacks with guns and shot every man they found there one after another. Many young ladies and wives are raped in front of their families. After that, they killed ladies too. They robbed all animals we bred such as horses, caws, sheep and goats. I lost everything too. Furthermore, they set fire to the village. Everything has gone. The government supports JJWA with aerial bombardments. This country is the mad nation. We cannot live any more without your assistance.」

(早朝、奴らはヘリコプターで我々の村にやって来ました。奴らは我々の家の上に爆弾を落とし、村の周りで働いていた人たちを銃撃しました。ヘリコプターの襲撃の後、JJWAは銃を持って馬に乗って来ました。そして、見付けた男達を次々に銃撃しました。沢山の若い女性達や妻達は家族の目の前でレイプされました。その後で、彼らは女性達も殺しました。彼らは我々が飼育している全ての動物たち、馬、牛、羊そして山羊を盗んでいきました。さらにその上、彼らは村に火を放ちました。全てが無くなりました。僕も全てを失いました。政府は空爆でJJWAを支援しています。この国はキチガイ国家です。我々はあなた方の支援無くしては生きて行くことができません)

祐子と亜希子は目に一杯涙を溜めて聞いていた。彼は続けた。

「More than 1500 villages were disappeared from this world by JJWA's genocidal and barbarous acts. They did not touch Arabian villages. It is obvious that they intent to eliminate non-Arabian tribe from Darful.」(1500以上の村々がJJWAの大虐殺と蛮行でこの世界から消えました。彼らはアラブ系の村には手を触れませんでした。彼らがダルフールから非アラブ系の種族を排除しようとしていることは明白です)

目を真っ赤にして夢中で話している少年の頭を祐子は胸に抱きしめた。

少年は祐子の胸の中で声を忍ばせて泣いた。

車は再びサバンナの森を抜け、一つの村に着いた。その村は沢山の人が立ち働く活気のある村だった。アラビア文字の標識が見える。アラブ系の村だった。子供達が車の周りに集まって来た。わいわい騒いでいる。近くの家の中から2、3人の大人達が出て来た。ジミーが窓を半開きにすると、髭を伸ばした40歳ほどの黒人の男性がアラビア語で言った。

「من أين أنت؟ مرحبا!」 <マルハバ、ハルタルティマンダ? > (.....)

「Hello.」(こんにちは)

祐子が、ジミーの後ろから顔を覗かせて言うと、男性は英語で言い直した。

「Hello! Where did you come from?」(こんにちは、どこから来たのですか?)

祐子が、自分の横の窓を開けて顔を出して言った。

「We came from Kigali Rwanda.」(私たちはルワンダのキガリから来ました)

「You came here long way from the south, don't you? I think you need a rest here. We have good tea. Please come to my house to take a rest.」(あなた方は南方から長い道を来たのですね。ここで休息を取った方がいいでしょう。いいお茶があります。どうぞ、家に来て休んでください)

男が何度も誘うので、祐子と亜希子は「ここで少し休もう」とジミーに言った。ジミーもメドリスナも難色を示したが、祐子はこの男に戦慄を覚えなかったため、亜希子と少年を促して車から降りた。少年はここがアラブ系民族の村であることを意識したためか、緊張した面持ちになっている。ジミーとメドリスナは小銃を手にして3人の後を追った。小銃を見ると、子供達はさっと散って、どこかに消えてしまった。大人達の顔も真剣さを帯びてきた。

「What is your name?」(名前は何て言うの?)

亜希子が歩きながら少年に尋ねた。



「Patrick」(パトリック)

少年はやや俯き加減に言った。3人が1軒の家の中に案内されると、ジミーが3人に附いて家の中まで進み、メドリスナは小銃を肩に掛けて家の入り口に立った。髭の男はこの家の主の様だった。4人は床に敷かれた絨毯の上に座るように促された。妻とおぼしき女性が小さなチャイを5人前用意して来て、4人の前にそれぞれティーカップを出し、もう一つを立てているメドリスナの所に持って行った。メドリスナはそのティーカップを受け取ると「サンキュー」と英語で言って、受け取った。

「Our country is under the serious conflictive condition between Arabian and non-Arabian. It is miserable situation. They have lost their houses, villages and lives too. The combat troops lose their mind and go mad while they are sent to the battle field even if they have had some philanthropic mind before. Only a few people who are conscious can slip away from the mad situation. I suppose you would come here to help distressed people. We hope to help damaged people in Darful too. However, it is very dangerous for us to do so. If we do so, we maybe also eliminated by JJWA. So, we have to keep silent for a while.」

(我々の国はアラブ系と非アラブ系の間のひどい戦闘状態にあります。悲惨な状態です。彼らは家を、村を、命さえも失ってしまいました。戦闘部隊は彼らが以前いくらかの博愛精神を持っていたとしても、戦場に送り込まれると、心を失い、気が狂ってしまいます。意識的であるほんのわずかな人達だけが狂った状況から逃れることができるのです。あなた方は苦しんでいる人々を救うために来られたのでしょうか。我々もダルフルの傷ついた人々を助けたいと思っています。しかし、そうすることはとても危険なことなのです。そんなことをしようものなら、我々もJJWAに抹殺されてしまいます。だから、我々はしばらくの間、沈黙を守っているのです)

主は、いきなり自分たちの置かれている状況を説明し始めた。祐子と亜希子にとって、それは耳新しいことではなかった。同じことをキガリの

ジェノサイド・メモリアルの受け付けの女性から聞いたことがあった。

「過去のルワンダと同じ状況を造り出している超本人は、今頃ワインを飲みながら石油の埋蔵量と、収入額の計算をして、にやにやしているに違いない」と祐子は思った。祐子達はその家では自分たちの意見を口にするにはなかった。自分たちの行っている行動が、どんな言葉より重いということ意識していた。幸せに暮らしているアラブ系の家庭の人々に礼を述べて、5人は再び車に戻った。そこからはジャングルの中を奥深く突き進む道だった。とても普通のトラックでは通れないようなひどい道だ。何度も水たまりにタイヤが埋り込んで、車が動かなくなった。そのたびごとに全員で、車を引っ張り上げた。アラブ系の家を出て、かれこれ2時間ほど走ると、大きな巖の向こう側に広い平地が見えた。無数の小さなテントが並んでいる。パトリックが背伸びするように身体を起こし、前方を指さして言った。

「That is our evacuation area. If JJWA find this area, all of us will be killed. The steep cliffs keep us at a distance from JJWA.」（あそこが僕たちの隠れ家だよ。JJWAに見つかったら、皆殺しだからね。ここは山が切り立っているから、JJWAも近づけないんだ）

ジープは人々に恐怖心を与えないように配慮して、ゆっくり避難場所に近付いて行った。祐子はパトリックに聞いた。

「Patrick, do you know how many evacuation sites exist in Darful?」（パトリック、ダルフルにはどれくらいの避難場所があるか知っている？）

「No, I don't. But some people talked together there are more than 100 hidden area for refugee in Darful.」（ううん、知らない。だけど、人々がダルフルには避難者のための秘密の場所が100箇所以上あるって話し合っていたよ）

「I see. Can you make a contact with the other people living in another hidden area? For instance, when you get enough foods or clothes, can you transfer them to the miserable people in another evacuation area?」（分かったわ。君は他の秘密の場所で生活している

人達と接触できるかな？たとえば、もし君たちが十分な食料や衣類を手に入れたら、それを他の避難場所にいるかわいそうな人々に渡すことができるかな？)

「Yes, Ma'am. I can do it. I'm sure I'll do it.」(はい、奥様、僕はできます。僕は絶対にやってみせます)

祐子はその言葉を聞いて、ぱっと希望が湧いてきた。前途に一筋の灯りを見たと思った。亜希子も祐子がパトリックと話している内容が、物質転送機の運用についてなのだということを薄々感じていた。しかし、ここでは祐子とパトリックの間の会話には一切口を挟まなかった。やがてメドリスナが車を1本の木に寄せて停めた。祐子は二人の兵士に小銃を袋に納め、人々を刺激しないように注意するように言った。4人はパトリックに案内されて小振りのテントが立ち並ぶ集落に入って行った。歩いて行くと、テントの外で、赤子を抱いている婦人や小さな子供達の姿が目飛び込んできた。通りすがりにテントの中が窺える。中には何も無かった。そこの生活は極めて厳しいに違いなかった。彼らが生きて、生活していること自体が不思議に思えるほどの貧困状態が目映った。

「由宇お姉様、ここはとっても貧しい村のようですが、わたくしにはなぜか暖かな波動が感じられます。先ほど伺った家より、ずっとずっと暖かな波動です」

「ええ、私もそれを感じているのよ」

祐子は乳飲み子を抱いて、痩せた身体から乳房を出して、子供に乳を与えている婦人の近くに近付いた。祐子は静かにやせ細った赤子の頭を撫でた。赤子は乳を飲んでいるのではなかった。唯乳首をくわえ、眠っているのだった。母親の乳房はしわだらけに萎びていて、とても乳が出てくるとは思えなかった。母親がうつろな目で祐子を見上げた。

「I cannot suckle my baby. No milk drain out from my breasts any more.」(この子に乳を飲ませられないの。もう乳房からミルクが出てこないのよ)

祐子は軽く頷くと、母親の手から、赤子を抱き取ろうとした。赤子はしっかりと母親の乳首に食いついていたが、祐子がかかるく腋の下をくすぐ

ると、口を離した。祐子は自分の胸を開き、乳首を赤子の唇に触れた。赤子はすぐに吸い付くようにして乳を吸い始めた。

「すごい力ね」

祐子は赤子の乳を吸う力に、一瞬頭の中が真っ白になった。それは一種の快感だった。赤子は暫く祐子の乳を吸い続けた。

「お姉様、赤ちゃん二人目ですね。本当のお母さんみたい」

亜希子は微笑みながら、祐子の授乳の姿を見つめていた。それはキガリの家でスバハに乳を与えている祐子の姿と寸分違わなかった。やがて赤子は目をぱっちり開いて、乳首を離した。祐子は赤子をそっと母親に返した。母親は頭を下げた。ジミーが袋の中から、パンを2つ取り出して、母親に渡した。母親はジミーに向かって深く頭を下げた。

「亜紀、明後日にはキガリに戻るわよ。今日と明日で、荷物の受け取り場所と、試験の方法なんかを決めましょう。この少年にほかの地域への配送ができる人達を教えてください。今、まだあの人は寝てないわね。連絡して、3日後にマシンを送ってもらいましょう。こうしては居られない。一日でも、一時間でも早く、ここに居る人達に救いの手を差し伸べなくては。・・・もう、この国の政府の暴挙を黙って見過ごすことはできないわ。はっきり認識できた段階で、直ぐに行動に出なくては、世界は変わりようがないわ。みんなが行動を起せば、必ず世界は変わるはずよ。先ず沢山の人が意識をその方向に向けることよ。私たちができるだけ早く、一歩でも前に進み出なくてはならないわ」

「わたくし、お姉様に附いて行きます」

それから祐子は賢にコンタクトを取った。祐子達がキガリに戻ったら直ぐに物質転送機を送ってもらいたいと言った。賢は即座に承知した。

「あの一、お姉様、わたくし、赤ちゃんがおっぱいを飲んで見ているのを見ていたら、急におなかが空いてきました」

「あら、元気がいいこと。じゃ、食事にしましょうか」

5人は一旦車に戻った。祐子がジミーに指示して、昼食を用意させた。パトリックは目をきょろきょろさせて、ジミーの用意しているパンやスープなどを覗き込んでいた。湯が沸き、カップスープに湯を注いで、食

事の支度が出来ると、5人は先ずスープを飲んだ。パトリックはカップを両手でしっかり握って、祐子や亜希子の飲み方を真似しながら飲んだ。その顔には喜びに満ちた、あどけない子供の表情が現れていた。パトリックはパンを少しずつちぎって、大切に食べた。祐子は食事をしながら、パトリックにこの避難場所の中に居る人材について尋ねた。パトリックは暫く天を仰いで考えていたが、その内、ぽつり、ぽつりと5人の名前を挙げはじめた。一人はチャドの国境に近いアル・ジュナイナの外れから逃れてきた男で名前をアブスワームと言った。J JWAの襲撃で村が焼け落ちる直前に村の者達を導いてチャドに逃し、自身は国境を越えて難民を追撃して来るJ JWAの軍に押し戻されるようにダルフルの奥深く逃げ込んで来た。暫く辺りを彷徨ってから、このキャンプに合流したのだということだった。このアブスワームはJ JWAの手から人々を護る為に奮闘している勇士で、危険を冒してまでも、各地に出向いて食料を調達して来て、人々に配給しているとパトリックが言った。パトリックの最も尊敬している人物のひとりだと言った。2人目はホーニイという男性で、穏やかな気性の人物だった。スーダン国内のみならず、周辺の国々に附いてさえも、地域的なことを知り抜いていて、現在のダルフルの内部状況を誰よりもよく把握しているとのことだった。この人物はその出身がはっきりしていないため、初めのうちはみんなから警戒の目で見られていたが、やがて、当初キャンプの在った場所がJ JWAの認識できている範囲内にあるという忠告が現実化したため、それからはキャンプの者達から一目置かれるようになった。彼の言葉を信用しなかった者達も、彼の想定を完全に無視することができず、彼が予想したJ JWAが襲撃してくる前日の夜半から、遠方にまで警備の範囲を広げて居たため、キャンプがJ JWAの襲撃を受けずに済んだ。ホーニイの予想通り、政府軍のヘリコプターがやって来たが、キャンプの住民はテントを急遽畳んで草で覆い、全員森の中に逃げ込んでいたので、政府軍はキャンプの存在を特定できず、その結果J JWAの攻撃も回避することができたのだ。政府軍やJ JWAが去るとキャンプは、直ぐにホーニイの教えた現在の場所に移動したのだ。このホーニイについ

てはまだ謎の部分が多く、パトリックも警戒心を捨てきれないでいたが、彼の持つ情報量の多さと、その正確さは避難民にとって、必要欠くべからざるものとして受け入れられたのだった。3人目は女性だった。男性のように前に出て戦う姿勢の少ないムスリムの女性の中で、彼女はひとときわ輝いていた。アフラは普通の家の主婦で、J J WAによる襲撃を受けるまでは、日々家庭を守って静かに生きてきた。亭主は勤勉な農夫である。家族も男児ひとり、女児ひとりの4人家族で、家族愛は人の手本になるほどだった。襲撃を受けて一瞬にして全てを失ってから、アフラの生き方は変わった。それまではムスリマとして、外出の時は顔にレースを掛け、自分の存在を押し隠すようにして行動していたが、全てを失ってからは、レースはやめた。そして、同じ苦境に立つ女性達のリーダーの様な行動を取るようになった。食料の確保、その分配、苦しい人々への優先的な配慮など、積極的に活動するアフラの姿を、人々は尊敬の眼（まなこ）で見つめるようになった。パトリックはアフラを母親のように慕っていた。4人目は農夫出身でライオンの息子という異名のビン・バブールという若者だった。その名前からくる印象とは異なり、どちらかと謂うと、敏捷で、行動範囲も広い活動的な男性だった。パトリックはビン・バブールを兄貴分の様にしていた。遠方の村との連絡を取ったり、行方の分からない者を探したりする能力に長けていて、車で1日掛かるような遠方との連絡も、半日もあればやってのけるほどの能力を持っていた。勿論、現代の通信手段を活用しての行動なのだが、その動きが野性的なため、周囲の者からは不可思議に行動をする少年と見られていた。パトリックはこの少年とふたりでなら、ダルフルのどの地域にでも1日以内に必要な物を届けることができると言った。最後のひとはイブ・アナム・バシールという名前の年配の祈祷師だった。彼の近未来予言はよく当たるとの評判だった。彼の居た村は襲撃を受ける前に、彼の予言に従って、思い切って村を捨てた。その結果、彼の村の人間は誰ひとり殺傷されることがなかった。政府軍のヘリコプターが飛来したときには、その街には誰ひとり住んで居なかった。ヘリコプターはもぬけの殻となった村の家々を空爆し、その後で襲撃してきたJ J WA

は村人を誰ひとり発見することが出来なかった。J J W Aは必死になって周辺を探索したが、その時には既に村の住民は別の土地に非難していた。更に避難先から、か弱い者達はチャドに逃げ、勇壮な者達はダルフルに居残り、様子を窺うことにした。そのほかの村の住民は、予期せぬ急襲で為す術もなかった。そんな訳で彼の村の住民は彼を尊崇していた。彼は山から予言を受けたのだと言った。彼は何時も山に食べ物を備えてきた。彼らの村は古くからある自然の神々を崇め、大地に感謝して生きてきた。イスラム教が入ってきてからも、彼はそれを続けていた。その全能の神に帰依した祈りが唯一神アッラーフに届いたのだと、人々は口々に言った。

「その山の神こそ応神としてのアッラーフの顕現だ。アッラーフが我々の村をお救いくださったのだ」

彼はその日から山の神アッラーフに祈りを捧げるようになった。

パトリックはパンを囓りながら、5人に附いて説明した。祐子はパトリックにその5人を呼んで来て欲しいと言った。パトリックは承知し、車から降りて、駆け出し、沢山のテントの間に消えて見えなくなってしまった。

「亜紀、5人が来たら、その人達の持っている靈性を探ってみてね」

「はい、わたくし、その人達の意識を窺ってみます」

30分ほどしてパトリックが5人を連れて車の近くに戻って来た。5人とも落ち着いている。祐子と亜希子はパトリックが祐子達について5人に事前に説明したのだと悟った。

「Ma'am, I brought them here.」（奥様、彼らを連れてきました）

祐子が車から降りパトリックに向かって言った。

「Thank you, Patrick. Thank you very much everybody for coming here. We came here from Rwanda to assist the people groaned from oppression.」（パトリック、ありがとう。みなさん、来てくださってありがとうございます。私たちは、迫害に苦しんでいる人達を援助するためにルワンダから来ました）

最年長の男が言った。

「I had a dream last night. I saw four people came in this camp and revived us. It's true, isn't it.」(わたしは昨夜一つの夢を見ました。4人がこのキャンプに来て、我々を蘇生させました。それは本当のことなのでですね)

祐子と亜希子はそれがイブ・アニム・バシールだと分かった。祐子が出た。

「That's right. It is true what you say. However, you have to receive our intention correctly. If you cannot catch the result of our support justly, it may cause another trouble from it.」(その通りです。貴女の言うことは真実です。しかし、あなた方は私たちの意図を正しく受け取らなくてはなりません。もし、我々の支援の結果を正当に受け取らないと、別のトラブルを引き起こすかも知れません)

若く逞しい体つきだが、額に深い皺があり、一目で苦しみの中を生きてきたことが分かる男性が出た。それがアブスワイルだった。

「Who are you? How you can help us? This is most dangerous area in Sudan. Most of Peace Forces have failed to help us. Even the UN hasn't been able to do it. Every caravan has been attacked by JJWA and robbed everything on the way to Darful. Most people who made contact with us were disappeared. Even if you could help us successfully, they may detect the secret area here by tracing your footprint. They are the evils. They chase us to hell.」(あなた方は誰だ? どうやって我々を助けるのだ? ここはスーダンの中でも最も危険な地域だ。殆どの平和軍は我々を助けるのに失敗した。国連ですらできなかった。どんな運送車もJJWAによって攻撃され、ダルフルに来る途中で全てを奪われてしまった。我々に接触した殆どの人々は消えてしまった。喩えあなた方が我々を救うことに成功しても、彼らはあなた方の足跡を追跡して、この秘密の場所を検知してしまうかも知れない。彼らは悪魔だ。彼らは地獄までも我々を追って来る。)

「I propose you one strategy to survive in this difficult situation. If you could agree with us, please listen to us.」(わたしはあなた方にこ



の困難な状況を生き抜く為の一つの戦略を提案します。もしあなた方が私の提案に合意できるのであれば、どうか我々の言うことを聞いてください)

アブスワイムの横にいる物静かな男性ホーニイが言った。

「I could feel some transcendental image on you. However, we have been distressed badly. Therefore, we cannot believe anything without visual confirmation. Please understand us.」(私はあなた方にある超越的なイメージを感じる。しかし、我々はひどく虐げられてきた。だから、我々は目に見える確証が得られるまで、どんなものも信じていない。どうか我々を理解して欲しい)

祐子が頷いたのを見て、亜希子が言った。

「Ok, I will fetch a sheet of blanket from my bedroom in my apartment in Rwanda now. Please keep silent for a while.」(いいでしょう、私が今、ルワンダにある私のアパートの寝室から、1枚の毛布を持って来ましょう。どうか、暫くの間、静粛にしてください)

5人は亜希子が何を言っているのか分からなかった。ルワンダのアパートから今、毛布を持ってくるなどということは5人にとって、考えられる範囲を逸脱していた。それでも、亜希子の最後の言葉を守って、全員口を閉ざした。亜希子はキガリのアパートの自分の寝室をイメージして、意識を集中し、瞑想状態になった。少しして、亜希子の姿がぼ一としてきて、やがてその場から消えた。5人は驚愕の表情を表した。2人の兵士も呆然と亜希子の居なくなった辺りを見つめたまま身動きしなくなった。パトリックはきょろきょろと辺りを見回した。祐子が言った。

「I think you cannot understand what you saw now. We can do these kinds of things as the usual activities.」(あなた方は今見たことを信じられないかも知れないと思います。われわれはこの種のことを通常の活動として行なえるのです)

やがて、亜希子が元居た場所にぼんやりと姿を現した。亜希子の姿がはっきり見えてくると、5人は亜希子が1枚の毛布を両手で抱くようにかかえていることに気付いた。

「Here, I am. Please give this blanket someone who is suffering from bad cold.」（ただいま。どうぞ、この毛布を誰かひどい風邪を引いている人にあげてください）

そう言うと、亜希子は5人の中のただひとりの女性アフラの近くに寄って毛布を手渡した。アフラは震えていた。アフラの目から涙が流れ落ちた。5人はその場に跪き、アフラ以外は、そのまま地にひれ伏した。祐子が言った。

「We are the same as you. Please stand up and come to me near here. I shall say an important thing. It has to be kept secret from the other people even in this camp. We have to prevent it from leaking.」（我々はあなた方と同じよ。どうぞ、立って私の近くに来てください。私は重要なことを言います。このことはたとえこのキャンプの人に対しても秘密にしないでなりません。我々はそれが漏洩するのを防がなくてはならないのです）

祐子は、物質転送機という名称は使わなかった。しかし、「秘密の洞穴を用意して欲しい。誰にも分からないように、その奥に品物を運び込むので、そこから困窮している多くの村々に品物を配送して欲しい」と言った。そしてそれは極秘の内で行わなくてはならないと付け加えた。「決して自分の欲望を出してはならない。もしこの中の誰かひとりでも、自分の欲望を出したら、その時に援助は終了せざるを得ない」と念を押した。5人は黙って頷いた。祐子は、5人にひとりずつ、誓いの言葉を述べさせた。その後4人はキャンプの中の苦しんでいる人々を慰問し、帰りに必要となる食料や水、衣類を除いて、全てキャンプの人々に与えてしまった。

賢は祐子からの連絡を受けると、原と相談して直ぐに物質転送機を1台手配した。原は夜半の天空から情報を得る方式を使った位置情報の取得方法を研究中だった。それは今後物質転送機がインフラの整備されていない場所で使用されることや、正確な位置が分からない場所への物質の転送にはもっとも有効な方法だった。しかし、天空の星辰から情報を得

るためには正確な天体運行認識が必要だった。原は市販のソフトハウスの保有するデータベースから情報を得ることにした。その情報を自動位置認識システムに組み込むことに成功した。原の努力の結果、程なく夜間の位置情報確認装置の試作機が完成し、北海道の山中での実験にも成功して、いつでも賢はマシンをキガリに持ち込むことができる状態になった。サンプリングする星辰の数は100にも上った。赤道付近では極の認識が難しいので、星座間の相対的な位置情報から現在位置を算出するしかなかった。

「賢さん、まだ現段階では、最低でも5時間の星辰の情報収集とサンプリングが必要です。最終的には1時間程度のサンプリングで位置決めができるようにしたいと思っていますが・・・」

「砂漠の中でも大丈夫ですかね？」

「もちろんです。砂漠のように上空に障害物が無いほうが、正確に位置を把握できます。多少の障害物でしたら、ノイズとして扱えますが、森のような場所ですと、位置決めは難しいと思います」

「そういう場合はどうやるのですか？」

「ぼくも、それを懸念して、PSTという方式をマシンに組み込んであります。PSTというのはポイント・サーチ・テレポーションで、受物装置に向けて小型の超短波発信装置を送るのです。最初は受物装置の正確な位置が分かっていませんから、超短波発信機は受物装置から離れた場所に送られてしまうはずですが、超短波発信機は転送された位置で、超短波信号を発信します。受物装置は超短波の発信されている方向とその強度、受信の遅延をチェックし、超短波発信機の転送された位置を推定します。そして、その超短波発信装置のあると思われる位置の位置情報を自分の現在位置情報としてセットしなおし、物質転送機本体にその情報を送ります。物質転送機本体の方は直ぐに超短波発信装置を回収します。そして、今度は修正された位置情報に向けて再び超短波発信装置を転送します。これを繰り返すのです。うまくゆけば、2、3回の試行で、正確な位置情報が得られます。さらに、人間が介在できれば、目視でその情報を編集することもできます。星の見える場所でしたら、直ぐ

に正確な位置を算出できます。星が見えないところや、天候が悪いときなどは、PSTと人間の介在で、位置を割り出します。いずれにしても、受物装置を設置する段階で、ある程度精度の高い位置情報があることが重要になってきます」

「祐子にそのことをよく伝えておこう」

スーダンに居る祐子から連絡を受けてから8日後にはマシンの用意ができた。原もそれに合わせたように、位置情報確認装置を作り上げ、受物装置にそれを組み込んだ。あとは祐子が無事にキガリに戻るのを待つだけとなった。

梓は毎日物質転送機の問い合わせや受注情報の整理に追われていた。そんな繁忙の中で、時々東領製作所からMIプロジェクトについての支援要請が来たが、梓は両親の健康管理を理由にそれを断り続けた。実際、梓は時間があるときは何時も滝川の両親の元を訪れた。父は梓の来るのが待ち遠しいようで、梓の声を聞くと、おぼつかない手つきで杖を突きつつも、急いで玄関に姿を現すのが常だった。家の掃除をし、昼食の支度をして、父親と食事を共にするのが梓にとってもひとつの楽しみになっていた。それから、いつも一人で母の所を訪れた。母も梓に対しては痴呆症を感じさせない、気丈な様子を見せてくれた。帰りがけには、いつも目にいっぱい涙を溜めて、梓の手をじっと握り締めているのだった。後ろ髪を引かれる思いの中、それでも両親の元気な姿を見られたことに胸を撫で下ろして、梓はいつも帰途に立った。

梓は愛子に対しても母親役をこなした。愛子もいつしか梓を姉のように慕うようになっていった。愛子は賢や梓に対して一度も反抗的な態度を示したことはなかった。

高校は1年遅れていたが、自分として1年先にタイムスリップした程度の感覚しか持っていなかったので、授業の理解度は他の生徒達を遙かに凌いでいた。高校では愛子のバレエの実力が知れ渡り、必然、教諭達も愛子に一目置くようになった。5月に入って直ぐに高校の実力試験があった。愛子の成績は学年で2番だった。1番は大学受験を目指して、中学校の時から猛勉強してきた男子生徒だった。愛子があまり勉強してい

るように見えないのに、良い成績を取ったことに、担任を初め各担当教科の教諭達は驚きの色を隠せなかった。愛子の経歴については一部の者しか知らなかった。実力試験の結果が発表されて暫くして、愛子は妙な噂を耳にした。それは、青森の殺人事件の犯人の娘がこの高校に通学しているという噂だった。愛子はそれが、賢が解決した失踪事件に絡んだ殺人事件を誤解してのことではないかと思っていた。ところがある日終業時間が過ぎてバレエスクールに向かう途中、何人かの女生徒達に取り囲まれた。女生徒達はミニスカートに黒いストッキングを履き、赤と黄緑色の刺繍を施してある揃いの紫色のジャケットを身に付けていた。その中のリーダーらしき生徒が愛子に迫るように近付いて来て言った。

「おい、内観、お前は殺人犯の娘じゃないのか？よくごまかして進学できたもんだ」

愛子は言った。

「ええ、父が母とけんかをし、誤って母を殺してしまいました。今、刑務所に服役中です」

リーダー格の女生徒が言った。

「へー、それにしてもうまくごまかしたもんだ。なあ、お前ら、こいつは人殺しの娘だよ」

リーダーを取り巻いている女生徒達が口々に言った。

「リーダー、そんな悪い奴は、やっつけちゃいましょうか？」

「そんな、虫唾の走る奴は、俺たちが明日から学校に出て来られなくしちゃいますよ」

リーダーが言った。

「まあ、そう慌てるな。こいつが俺たちをだましていたことに、落とし前を付けりゃ、それでいいだろう。おい、おまえ、何とか言ってみろ」  
愛子は泰然としていた。

「私に落ち度があるのでしたら、誤ります。だけど、私は何も悪いことをした覚えはありませんから、それでも疑うというのなら、今から警察に行って、白黒をはっきりさせましょう」

「おまえ、いい度胸してるじゃあねえか。だが、あいにく俺たちは警察

が大きーでな。てめーがどうしても、そうして一んなら、俺がサツに替わって聞いてやろーじゃあねーか、さあ、身の潔白を喋ってみろ」  
愛子は自分が失踪したこと、事情があつて、母が離婚したこと、母麻子とふたりで生きた苦しい生活、そして、そんな中で父親の誤解による母の殺害、自分が養女になったこと、養父の転勤で札幌に来たことを説明した。そして、自分に責任があるとすれば、自分が失踪したことで、家庭が崩壊してしまったこと、そのため父母の中が悪くなってしまったことだと言った。その話を聞いて、二人の女生徒は怯んだが、リーダーの取り巻きのひとりが言った。

「結構じゃあねえか。リーダーがてめーの戯言を聞いてくださったんだから、謝礼を払うのが礼儀ってもんじゃあねえか、えっ？」

愛子は言った。

「お金はありません。まだ私が悪いとおっしゃるのなら、そう言ってください」

「うるせえ、金が無けりゃ、落とし前を付けてもらうだけだ。付けるのか、付けねえのか、はっきりしろ！」

「何をすればいいのですか？」

「そこに座れ、俺が落とし前の付け方を教えてやる」

そう言うと、リーダーはいきなり、愛子の頬を平手打ちし、襟首を掴んで、無理矢理道路に座らせ、愛子の身体を足で蹴った。愛子はよろけてその場に倒れた。

「賢パパ、助けて！」

愛子は叫んだ。賢はその叫び声を意識で受け取った。祐子に送る物質転送機の調整をしているときだった。そのまま、意識を愛子に移し、愛子の下にテレポーションした。賢は空中に浮遊した状態で顕現した。愛子が叫んだ。

「賢パパ、来てくれたのね」

賢は状況を直ぐに把握した。そして、女生徒達に向かって低く響く大声でゆっくり話した。

「この世に生を与えられし者達よ、汝のなせる行為を見つめなさい。人

を苦しめる為に産まれて来し者達は、必ずや地獄の業火に焼かれ、滅びるであろう。自分の悪行に気付き、人々を愛し、助ける者に変身しし者は、永遠の命を約束されるであろう」

そう言うと、賢は女生徒達のいる場所の上空4箇所に灯油を染みこませた稲束を出現させ、即座に引火した。賢の姿と、その響き渡る声におびえていた女生徒達は自分たちの上空に火が燃え上がるのを目の当たりにし、3人の女生徒が失神し、リーダーとその取り巻き3人は顔面蒼白となり、尻餅を突いて、がたがたと震えだした。リーダーは失禁し、2、3歩後ずさりすると、腰を抜かしてしまった。賢は静かに愛子の下に降り、ハンカチで血の付いた愛子の口元を拭い、愛子を抱きかかえて、一気にバレエスクールの前にテレポーションした。

「賢パパ、ありがとう」

「愛子、大丈夫か？口の周りが切れていたけど・・・」

「うん、おなかを蹴られたけど、大したこと無かった。大丈夫だよ。賢パパ、大好き。ありがとね」

愛子はバレエスクールの中に姿を消した。賢はそのまま家の居間にレポートして戻った。

翌日、愛子が登校すると、途中で二人の女生徒が待っていた。昨日仲間達と一緒にだった二人だったが、後方に居て、ただリーダー達のやることを凝視していた女生徒だった。

「内観さん、ごめんなさい。私たちを許して。あんな怖いものを見たのは初めて。わたしたち、地獄の火に焼かれるのはいや。今日から、困った人を助けることに決めたの。許してくれるかな？」

「ええ、もう、あんなことはしないでね」

「うん、約束する」

「約束するわ」

愛子はにっこり笑って、二人の女生徒達と分かれた。校門を潜って、校庭に出ると、昨日、愛子に暴言を吐き、暴力をふるった女生徒達が隅の方で草取りをしていた。ミニスカートではなく、普通のスカートと制服を着ていた。愛子が通り過ぎて行くのに気付かないふりをしているよう

だった。愛子も女生徒達から意識を切り離して、クラスに入った。何人かの生徒達が寄り集まって、ひそひそ話をしている。愛子の元気の良い挨拶に、生徒達も挨拶を返したが、ちょっと振り返ってから、直ぐに愛子から視線を逸らせてしまった。黒板に大きな字で、「神の子、愛子」と書かれている。愛子は黒板の前に行き、それを消して、自分の席に戻った。

そんなことがあってから、愛子は、普通の人間とは見なされなくなってきていた。愛子はそういう扱いを受けることを特に嫌った。入学当初から気が合っていた杉村亜美と水木原有里奈という二人の女生徒も、愛子の噂に一歩引いてしまっていた。愛子は昼休み時間にふたりに言った。「人間って、いろいろな力があるんだって。だけど、ほとんどの人はそういう力を使えないんだって。私ね、そう云うみんなの使えない人間の機能の内のいくつかを使えるんだって」

ふたりの友達は目を大きくして聞いていた。

「誰にでもある人間の機能の一部なのよ。亜美や有里奈にもあるのよ。ただ、亜美も有里奈も使えないだけ。たとえば、消えてしまうとか、空を飛べるとか」

「えっ？何、何、空も飛べるの？」

亜美がびっくりして言った。

「うん、時々、意識を集中するとできるよ」

有里奈が言った。

「ねえ、愛、やってみせてよ」

「だめよ。みんなが、ますます私から遠ざかっちゃうもの」

「ねえ、ちょっとだけでいいから」

3人は校舎の裏手に行った。愛子は二人に「絶対誰にも言っちゃダメよ」と言って、瞑目し、身体を1メートルほど浮揚させてから直ぐに下に降りた。二人の女生徒は目を剥いて見つめていた。

その日の下校の時、不良グループのメンバーだった一人の女生徒が愛子の後を追って来て言った。

「内観さん、この間はごめん。私を仲間にしてくれないかな？」



「いいよ。だけど、別にグループとか無いよ。友達になろうよ」

「うん、友達の中に入れて」

名前を上月若菜と言った。男性のような鋭い目つきの細面の女生徒だった。上月は両親が不在がちで、ひとりで過ごすことの多い女生徒だった。寂しさを紛らわすために、不良グループに入ったのだった。愛子が行った空中浮揚のデモンストレーションを木陰で見っていたのだった。愛子のやる不思議を知りたかったのではなかった。愛子の通ってきた、過酷な人生に興味を覚えていた。夫婦仲の悪い両親を持った子供という立場に共感を覚えていたのかも知れなかった。杉村亜美と水木原有里奈との中が次第に疎遠になっていった反面、愛子は上月若菜と次第に親しく付き合うようになっていった。上月若菜の両親は両方とも公務員だった。父親は市会議員、母親は幼稚園の保育師だった。二人とも仕事が忙しく、若菜の面倒を見る時間が無かった。若菜は近くの保育所に預けられて育った。若菜が子供の頃、父と母はよく喧嘩をした。若菜はそんな両親の姿が嫌いだった。

「私も両親から逃避しようとしていたんだ。だけど、消えなかったけど」

「はっはっはっは、若菜は消えるスイッチがOFFなんだよ」

「ねえ、ねえ、どうすればONになるの？」

「私も知らない。パパが言うには、意識が一点に集中したときになるらしいよ」

「ふうん。私もやってみようかな」

「パパは、普通はなかなか難しいって言ってた。だけど、最近できる人が多くなってきているんだって。そういう時代なんだってよ」

その時前方から5人の男子生徒達が愛子達の方に向かってやって来た。

「よう、おめえだべか、空とぶっちゅうのは？」

「ようよう、ちょっと飛んでみろや」

愛子は黙っていた。若菜がキッと行って言った。

「飛ぶたって、なまらこわいだわ」（飛ぶって言ったって、すごく疲れるんだよ）

「よう、おめえ若菜じゃねえか。いつからこいつの見方になった？」

「うるさいんだよ。引っ込んでな」

若菜は負けていない。

「いいふりこいて、がんべたかりが！」(格好付けやがって、出来損ないが)

男子生徒のひとりがムキになった。愛子が言った。

「私が飛んで見せればいいの？」

「おう、おう、言うじゃあねえか。最初からそう言えば、なーんも言わんだわ」

愛子は、瞑目し、意識を天空に向けた。身体が浮いた。少し浮いてから、わざと意識を解放した。空中1メートルほどの高さから、すんと落ちて、愛子は転んだ。

「すげーな、おめー。もう一度やってみろ」

若菜は怒った。男子生徒達に向かって強い口調で言った。

「おだつんじゃないよ。愛子はなまらがおってるべ」(ふざけるじゃないよ。愛子は酷く弱っているんだ)

若菜の強気の言葉に男子生徒達も、たじろいで、それ以上言わずに引いてしまった。愛子は若菜を逞しく感じた。男子生徒達がぶつぶつ言いながら行ってしまうと、愛子が言った。

「若菜、ありがとう。本当はね、さっき、わざと落ちたんだ」

「うん、分かってる。あいつらしつこいからね。怪我無かった？」

「うん、大丈夫だよ。わたし、バレエ習ってるから、着地の時の足の使い方、何となく分かるんだ」

「すごいね。だから、さっきうまく転んだ・・・愛子、あんた両親が喧嘩しても、二人とも大切だって言ったね。どうやったら、そんな気持ちになれる？」

「わたし、なんか、いつもお母さんのおなかの中から出て来たって記憶があって、お母さんの子供なんだって感じていたんだ。だから、そうだ、自分がお母さんの一部みたいに感じてたんだよ。だからお母さんが苦しいと自分も苦しくなってしまう・・・」

「ふーん。だけど、お母さんと喧嘩ばっかしてるお父さんのことも大切

に思っていたんだろ？」

「うん、お父さんも結果的にあんな風になっちゃったけど、私には優しくかった。お母さんと結婚したんだから、きっと産まれたときは一生お母さんと一緒に生きることになっていたんだよ。二人の愛の結晶が私だと思っていた。私には、お父さんもとっても大切な人だったんだ」

「だけど、お父さんが、お母さんを殺してしまった。その後、どうなった？」

「私の心は乱れて、しばらくはトラウマみたいになったんだ。あの衝撃的な場面が何度も目の前に出てきて、身体が震えた。だけど、今のパパとパパの親友がトラウマを退治してくれた」

「ふうん、トラウマって退治できるんだ」

「そうだよ。虎のような馬だからね。牙を剥いて、すごい勢いで襲ってくるんだ。若菜、逃げちゃダメだよ。トラウマも逃げると追っかけてくる。背中に乗って、よしよして言うんだ。そうすると大人しくなって、自分のねぐらに帰って行くよ」

「愛子、面白いね。愛子なら分かるかな、私がなぜ両親から遠ざかっているか？子供の頃、私も両親に甘えていた記憶がある。だけど、いつの間にか、両親を避けるようになった。それに、ふたりの仲が悪いのにヘドが出るようになったんだ。だから、家出した。だけど、父が警察を使って直ぐに私を見つけ出した。それから、私は監視を付けられた。私は、それがいやで堪らなかったから、監視を外してくれたら、もう、家出しないと約束した。両親の顔を見なくて済むように、自分の部屋に籠もるか、学校からの帰りにできるだけ仲間と一緒に居ることにした。だけど、頭が混沌としていて、あまり、楽しくなかった。本当は私も、幸せな家庭が欲しいんだ」

「あのね、若菜、パパがよく言ってるけど、この世界のものは自分の意識で、どうにでも変化させることができるんだってよ」

「それって、どこかの先生も言ってたな」

「最初はちょっと難しいかも知れないけど、頭で考えるんじゃなくて、自然にそう感じるように自分を動かすんだよ。だから、「みんな大好き。

今生きていられるのは、奇跡なんだ。私は生かしてもらっている」って感じるようにするんだ。わたし、大分できるようになったよ。若菜、これから暫く、それを続けてみなよ。「お父さん、お母さんから産まれてきた。私を育ててくれた。何もしなくてもご飯を食べさせてくれる。学校にも行かせてくれる。ありがとう」って・・・最初は頭で考えてもいいから、いつもそう思っていると、だんだん、そんな気がしてきて、本当にそう感じるようになるよ。そうすると、不思議なんだ。周りが替わってゆく」

「だけど、愛子、あんたのお父さんは変わらなかったじゃん。殺人までしてしまっ」

「うん。直ぐには変わらなかった。だけど、私、前の父は、今居るところが一番適して居るんじゃないかと思っているよ。時々面会に行くんだ。ほんの少しずつだけど、変化しているよ。時間が掛かるんだ、きっとね」

「ふーん。そうか、時間が掛かることもあるんだ」

「そうだよ。パパとパパの親友は、「時間は自分が作ってる」って言うてる。だから、1年も100年も同じなんだって。これって難しいよね」

「愛子、私、なんかそれ分かるような気がする」

若菜は愛子に附いてバレエスクールの前まで来てしまった。

「若菜、ここが私の通ってるバレエスクール。じゃ、また明日ね」

「愛子・・・私、ちょっと覗いてみてもいいかな？」

「ちょっと、待って、先生に聞いてみる」

愛子はドアを開けて中に入って行って、直ぐに戻ってきた。ドアの外に顔を出すと、若菜に向かって指でOKサインを示した。若菜は愛子に附いてスクールの中に入った。黒い練習着を着た沢山の受講生が一生懸命練習をしている。エネルギーで、喜びに満ちている感じが分かる。若菜にとっては、これまで一度も味わったことの無い雰囲気だった。

「愛子さんのお友達？」

「はい、上月若菜です。バレエ見せてもらえますか？」

「ええ、いいわよ。そうね、後で愛子さんと私がベゼルを踊って見せてあげるわ。愛子さん、先ずいつもの基本だけやってね。それから、発表

会の練習を兼ねて、私がアルブレヒトを踊るから、あなたいつものようにベゼルやってみてね。相手が違うけど大丈夫ね」

「はい、先生」

絹原は愛子とともにベゼルの踊るのが好きだった。愛子が基本を練習している間、若菜は椅子に腰掛けて見ていた。自分はこれまで、現状から逃れようとして、何かを求めてきたが、途端にそれがむなしく感じられた。愛子は自分自身を発散させていた。ただ気持ちよさそうに身体を動かしている。暫くすると愛子が基本のレッスンを終えた。頃合いを見計らったように絹原が愛子の近くに近付き、一言二言話した。それから絹原は練習中の者達に、これから発表会の練習に入ると宣言した。全員がレッスンを納め、周囲に散って隅の床の上に腰を降ろした。先ず何人かが出てきて、位置に着いた。絹原の合図で音楽がスタートし、全員が白鳥の湖を踊り始めた。白鳥の湖が終わると、次に絹原は愛子に向かって頷いた。幻想的な音楽が流れ初め、ふたりは踊り始めた。愛子の動きは美しかった。若菜はいきなり鳥肌が立った。ふたりの踊りの中に引き込まれて行く自分を感じていた。ベゼル役の愛子とアルブレヒト役の絹原がまるで恋人どおしのように親しげに踊っている。ふわっと飛び上がる愛子は将に天使だった。降りるときも、考えられないほどゆっくりと着地した。それでいて、曲からずれない愛子の動きは若菜に感動を覚えさせ、知らずに目から涙が流れ出てきた。周囲を取り囲んでいる者達も、まるで愛子の動きに釘付けになっているようで、指一本動かさずにじっと凝視していた。ふたりが踊り終わると、全員がため息を吐いた。若菜は右手の甲で涙を拭った。愛子が若菜の処にやって来た。

「ちょっと待ってて、あと10分くらいで終わるから」

「愛子、感動しちゃったよ。あんた、すごいね」

バレエの練習を終えると愛子は直ぐに着替えて戻って来た。絹原が愛子に附いて来た。

「上月さんでしたね。愛子さん素敵でしょう？私も愛子さんのベゼル大好きなの。愛子さんの自己流の癖も大分抜けてきているようだから、もう一息ね」

「わたし、感動して、涙出ちゃった」

「今度、6月に発表会があるのよ。上月さんも是非見に来てね」

「はい、必ず行きます」

スクールを出ると、若菜が言った。

「あんた、バレエずっと習ってきたの？」

「ううん、自分で練習しただけ。自己流だよ。だから、先生の癖を直すの大変みたい」

「自己流って言ったって、何処で踊っていたの？」

「紀ノ川のほとり」

「あの、和歌山の紀ノ川？」

「そうよ。私、あそこで育ったの」

愛子の目が潤んだ。

「ごめん、つらい思い出があるんだ」

「ううん、お母さんのことを思い出しちゃったから・・・お母さん、亡くなる前も、亡くなった後も、幸せだって言ってた。パパを愛しているって」

「亡くなった後って、分からないんじゃない？そんな気がしたってこと？」

「ううん、分かるよ。パパが亡くなったお母さんと呼んで、一緒に話した。お母さん、幸せそうだった。生きていたときより、もっと幸せそうだった」

「ちょっと、待ってよ。死んだら終わりじゃない」

「終わりじゃないみたいだよ。だけど、普通の人は終わりみたい。終わりみたいに死んだ後のこと分からないみたい。本当は、死んだ後は、朝目が覚めたときと同じようなもんらしいよ」

「うっそう、信じられない」

「そうらしいよ。パパの親友が死んだ人と話のできる機械を作ったのよ。その機械を使っても、話できるよ。その機械だと、顔も見える」

「えーっ？信じられなーい・・・ねえ、ねえ、その機械、どこにあるの」

「家にもあるよ。この間の東海地震の時、パパと親友がその機械を使っ

て、死んだ人と話をしたり、死にそうな人を探したりしたよ」

「えーっ！なんだか怖（こわ）。怖いけど、見に行っていていい？だけど怖いな。なんだか寒気がしてきた」

若菜は次の日曜日に由仁の家に来ることになった。

祐子は艱難辛苦を乗り越えて、漸くキガリに戻ることができた。ダルフルを出てから10日も掛かってしまった。アビエイを避けて東廻りのB58号線を経由し、ワーウの南東でA43に出ようと考えて南進したのだが、それが裏目に出た。途中、南北スーダンの戦闘に遭遇してしまった。4人はやむなくジャングルの中で3日間待避してはならなかった。ルワンダの支援部隊に連絡を入れたかったが、通信する手段が無かった。亜希子がテレパシーを使おうとしたが、祐子がそれを止めた。亜希子はテレポーターションでアパートに戻って、食料を確保して来ると言ったが、祐子はそれも許さなかった。亜希子がこの場に戻って来られるという確証が持てなかった。戦闘状態の荒んだ意識の中に巻き込まれることを警戒したためだった。4人は森の奥深く入り、戦闘が小康状態になるのを待った。ジャングルでの野宿は亜希子を恐怖の真っ直中に置いた。夜になると獣たちの遠吠えが聞こえた。亜希子の一番の頼りは祐子だった。いつも祐子にぴったり身を寄せて恐ろしい夜を乗り越えた。祐子は二人の兵士が歩哨に立ってくれたので、安心してた。もう一つの問題は食糧だった。1週間分の食料しか残していなかったので、一回の食事の量を減らして急場を凌いだ。ジミーとメドリスナは哀れだった。空腹に耐えているのがよく分かった。祐子は自分の食事はほとんど摂らずに、二人の兵士に与えた。時々、水を飲んで空腹を凌いでいた。一行は戦闘が小康状態になったときに、一気に戦闘地域を抜け出した。その後はスムーズに進行できた。5日目にジミーがめまいを起こして倒れた。祐子は食事の制限を解いて、全員が通常の食事を摂るようにした。食事を摂るとジミーも直ぐに回復した。しかし、7日目にはついに食料が完全に底を突いた。4人は途方に暮れたが、なんとかあと1日空腹に堪え、ダルフルの避難民のキャンプを出て8日目の昼頃、やっとうガ

ンダの国境に辿り着いた。早速一行はグルーの街で食料と水を買ひ、それで一安心できた。それから2日後の昼前、漸くキガリに戻ることができた。二人の兵士はキガリに入ると、思わず喜びの叫びを揚げた。

「Bravo！」(ばんざい！)

「Jimmy, Medorisna, Shukrani」(ジミー、メドリスナ、ありがとう) 祐子はそのまま3人を、キガリで一番評判の良いレストランに連れて行った。二人の兵士においしい料理を思い切り食べさせた。二人とも遠慮せずに食べた。食事が済むと、祐子は先ず、亜希子をアパートに送り、それから自分の家に戻った。入り口のドアをノックすると、アイリーンがスバハを抱きかかえて姿を現した。アイリーンはうれしさに涙を流した。スバハはアイリーンの腕の中で眠っていた。祐子はアイリーンからスバハを受け取ると、そっと胸に抱きしめた。スバハが目を開けた。しかし泣かなかった。口をもぐもぐさせている。二人の兵士が祐子の荷物を運んで来て、居間の大きなテーブルの脇に置いた。祐子は二人にもう一度礼を言った。兵士達は敬礼をして部屋を出て行った。祐子はスバハを抱いたまま自分の事務室に向かった。スバハが愛おしかった。事務室に入ると、祐子は早速スバハに母乳を与えた。スバハは初め、躊躇しているかのように直ぐには乳首を口に含まなかったが、やがて、吸い付くようにくわえると、目を瞑って、必死に吸い始めた。祐子は長い旅の疲れが一気に消えて行くような寛ぎの海に浸った。アイリーンは祐子に寄り添って、スバハの顔を覗き込んでいる。

祐子の指示は5人に、謎解きのような感覚を覚えさせた。先ず受物装置を置く場所を特定しなくてはならなかった。ホーニーに、絶対JJWAや政府軍にかぎつけられない場所が無いか訪ねた。ホーニーは近くのジャングルの中にそのような場所があると言った。山影にある平地で、近くに水辺があり、そこにはワニも生息しているとのことだった。山肌に2つの洞窟があり、そこはかつて自分たちの先祖が住んでいた場所のようだと言った。その場所に行くには、毒蛇の多く生息している場所を通り抜けなくてはならなかった。ホーニーを先頭に、全員でその場所に行



ってみた。一人では絶対に行けないような曲がりくねった道無き道を20分ほど進むと途中で全長3メートルもある大きな毒蛇が姿を現した。ホーニーは平然としている。一行はイブ・アニメ・バシールの指示に従い、蛇を刺激せずにやり過ぎた。やがて川辺に出た。川辺にはカバの姿はあったが、ワニはいなかった。そこから少し奥に入ったところに、岩場があり、その岩場の向こうに周囲を大木に囲まれた5メートル四方ほどの草地があった。確かにそこならJJWAのみならず、どんなよそ者にも入り込まれる危険性はなさそうだ。山が迫っていて、山肌に洞窟がひとつ窺えた。もうひとつの洞窟は少し先にあるということだった。その辺りは全体が、上空からも死角になっていて、見えないことは明らかだった。祐子はその洞窟の中に、受物装置を設置することに決めた。祐子は準備ができ次第、パトリックに連絡するので、その次の日から毎朝、二人一組になって順番にここに物資を取りに来るようにと言った。問題は受物装置の電源をどう確保するかという点だったが、その点は賢に相談することに決めた。マシンの設置については誰にも話さなかった。一旦設置位置が決まったら、受物装置を洞窟の中の巖の陰に隠そうと考えていた。

スバハが乳首を離して、こっくりこっくりとまた眠りに落ちてしまっていた。祐子はそっと乳房をしまつて、スバハをアイリーンに手渡した。それから事務機の椅子に腰掛けて、賢に向けてテレパシーを送った。「あなた、キガリに戻ったわ。物資を送る場所が決まったわ。応答してください」

賢は夕食を済ませて、四人で精神改革の為の試行サイトの話をしていた。「賢さん、やはり北海道ですかね？」  
「原さんはどこがいいと思う？」  
「四季がはっきりしていた方がいいと思いますが、北海道は冬が厳しすぎるような気がします。人々のコミュニケーションが大きなテーマですから、冬の間家の中に籠もりきりでは、あまり・・・」

「そうですね。中部地方辺りにしまししょうか？冬はある程度雪が降った方がいでしょう。それに、海も見えた方がいいけど」

「諏訪湖の近くなにかどうですか？湖だけど」

「それはいいですね。あそこなら、日本の中央付近ですから……」  
その時賢の意識の中に祐子の声が響いた。

「祐子、無事に戻れたのか？よかった」

「あなた、明日、物質転送機を設置できるかしら？」

「うん、こっちは準備ができています。何時でも持って行けるよ」

「あなたも来てくれるの？」

「うん、ただ置くだけでは済まないからね。それに荷物の発送先の設定が結構厄介だから……」

「機械は大きいの？」

「送信側のマシンはオフィスの小型コピー機ほどの大きさだよ。だから、機械自体も物質転送機で送ってしまおうと思っているよ。祐子、フルマに送ればいいのか？」

「いいえ、私の家に送って欲しいわ。フルマには沢山の人が出入りしているから。不審に思われても困るし」

「分かった。それじゃ、君の家の機械を送る場所の正確な位置情報を教えてくれないか？」

「そんなに正確な位置は分からないわ」

「どのくらい誤差がある？」

「そうね、きっと一キロ四方くらいはあるわね」

賢は祐子にマシンを転送する位置を確定するために、家の外に出て、位置確認をする必要があることを告げた。直ぐに実験してみることにした。原は喜んだ。実際海外に向けて物質が転送できるかどうかを試す絶好の機会だった。全員賢の趣味の部屋に移動した。マシンの準備ができると、操作は原が行うことになった。祐子はノートとペン、それに電卓を持つと、賢の指示に従って、家の外に出た。祐子の家の前には広い空き地がある。その中央に立つと、祐子は賢にテレパシーで準備ができたことを告げた。受物装置はバッテリー駆動状態にセットし、電源を入れてから、

衝撃防止用のウレタンフォームを巻き付け、その上に”Mama Yuko”と書いた。原が受物装置を祐子の言った経緯度と標高の地点の一メートル上空に転送した。賢が祐子の確認を取ったが、祐子は、何も送られて来なかったと言った。全員不安になった。原は、小型の携帯用超短波発信器の電源を入れた。耳をつんざくようなピーツという大きな音が響き渡った。原はうるさい音のする端末を受物装置に向けて転送した。

「あーうるさかった。原さん、あれ何なの？」

「超短波発信機ですよ。愛子さん、あれで場所を特定しようとしているんですよ。誰かが気が付くでしょう」

「よくわかんないけど、あんだけうるさければ誰か気が付くね」

祐子が辺りを見回していると、ジミーがジープでやって来た。

「Mama Yuko, nilipata ni. Hili ni nini?」(ママユーク、これ見付けました。これ何ですか?)

ジミーはウレタンフォームの巻き付けてある受物機と携帯超短波発信器を祐子に手渡した。ジミーは祐子を家に送り届けてから、ずっとこの家の周りを周回して、警備していたのだった。畑の中で超短波発信器がピーツという音を出していたと言った。警戒して近付いてみたが、爆発物や、特別な危険物ではなさそうなので、あちこちのボタンを押したら音が消えたと言った。その近くに祐子の名前を書いた包みがあったので持って来たと言った。祐子はジミーが休息も取らずに、自分を護ってくれたことに心から感謝した。

「Jimmy, Shukrani. Tafadhali kuchukua mapumziko.」(ジミー、ありがとう。休んでくださいね)」

ジミーは軽く頷いて、そのままジープで走り去った。祐子は受物装置を抱えて家の中に入った。スバハを抱きかかえてアイリーンが近付いてきて、物珍しそうに受物装置と超短波発信端末を覗き込んでいる。祐子はそれらを事務室に運び込んだ。

「あなた、届いたわ。畑の中に落ちていたらしいわ」

「どのくらい離れていたのかな？」

「ジミーの話では、500メートルほど離れた場所のようだよ」

「祐子、これから微調整を行うよ。君の家の今居る場所が、さっき教えてくれた位置情報から正確にどの方向にどれだけずれていたか分かるかな？」

祐子は再び外に出て、先ほどのジミーの説明からおおよその方向と事務所からの距離を賢に伝えた。賢がそれを原に伝えると、原は祐子の居る位置の情報を実際に祐子が立っている屋外に修正した。祐子が賢に外に出ていることを伝えると、原は祐子の言った位置に向けて、別の超短波発信器を転送した。今度は祐子の耳に超短波発信器の音が聞こえてきた。祐子がそこに近付いてみると、元の位置から80メートルほど北西にずれた所だった。見付けたとテレパシーで伝えると、原は即座に超短波発信端末を回収した。目の前の超短波発信端末が消えたのを見て、祐子はびっくりした。ずれていたおおよその距離を告げると、原はまた位置情報を修正して超短波発信端末を転送した。今度は三メートルほど南にずれていた。賢は祐子に家の中に入るように言った。事務所の位置情報の補正值を祐子が連絡すると、今度は事務所の中の受物装置の手前2メートルほどの位置に超短波発信装置が現れた。祐子がそのことを告げると、原は物質転送機を自動位置検出モードに切り替えた。祐子の部屋に超短波発信装置が現れたり、消えたりを三度繰り返し、遂に受物装置の所に超短波発信装置が現れた。祐子がそのことを告げると、賢は祐子にウレタンフォームを外して、機械を部屋の中央に置き、位置確定スイッチを押すように告げた。先ず、賢は祐子に何か送ろうと思った。しかし、自分の身の周りには、祐子の思い出に繋がるようなものは何も無かった。賢は東海地震の救援用に用意したティッシュペーパーが大量に残っているのを思い出した。居間に行ってそれを10箱持って来て、原に渡した。原はそれを直ぐに転送した。祐子は驚いた。事務所の受物装置の上に突然日本製のティッシュペーパーが現れたのだ。これまでキガリで見てきたティッシュペーパーは大抵中国製のあまり質の良くないものだった。それも多くは出まわっていなかった。祐子はティッシュペーパーを取り上げて、直ぐに賢に報告した。賢はテレパシーで伝えた。

「今から、アフリカ仕様に改造した物質転送機を送るよ。危ないから少

し離れているよ」

賢と原は祐子用に用意した改造物質転送機を転送装置の上に置いた。原が送信ボタンを押すと、祐子の部屋の受物装置の横に物質転送機が現れた。祐子は、夢でも見ているのではないかと思った。大きなマシンが突然目の前に現れたのだ。

「祐子、日本はこれから夜半になる。明日の昼頃、そっちの時間で明朝、俺が君の部屋に行く。そこでスーダンとの物質転送の段取りを決めよう。スーダンは君の所より、もっとやりにくいぞ。俺はテレポーション、空中浮揚、テレパシー、透視全ての方法を総動員して、物質転送のインフラを構築するよ。俺とお前、ふたりで構築しよう。他の人は連れて行けないからな、いいな」

「分かったわ。もう、私、あなたにも平常心で会えると思う。あなたに逢えるのを楽しみにしているわ」

祐子の脳裏に、一年前の光景が浮かんだ。賢とふたりで生きる生活を必死で求めていた。それから、様々なことがあった。何十年も経ったような気がした。しかし、実際にはたった一年あまりしか経っていない。自分がスバハを生んだことが不思議にさえ思えた。祐子は久しぶりに賢とふたりきりになれることに胸が高鳴った。本当に一年ぶりの感情の盛り上がりだった。その感情の盛り上がりを客観的に見ている自分に気付いた。

賢は祐子が亜希子のことに触れないのを不思議に思った。ふと意識を趣味の部屋に戻すと、そこには梓と愛子が賢の姿を見据えて、じっと佇んでいた。

「今日はこれまでにしよう。原さん、ご苦労様、みんなもありがとう。明日の朝、俺はアフリカに行ってくる。祐子の正確な位置情報が確定したから、迷わずにテレポーションできるはずだ。スーダンでのインフラ構築は、多分明日一杯で終わるだろう」

「あなた、明日の朝では、向こうが真夜中ですよ。お昼頃になさった方がいいのでは？それに、私にできることがあれば、お手伝います。」

「僕も、何か手伝いますよ」

「うん、ありがとう。ふたりとも、日本に居て、バックアップしてくれないか？梓の言うように、こっちの朝じゃ、向こうは夜中だよな。昼少し前に出掛けることにするよ。」

梓は少し寂しそうだったが、賢は梓の心の動きを知って、軽く会釈した。

「スーダンの紛争地域に入るから、誰も連れて行けないよ。祐子がキガリに居て、俺がダルフールの避難民のキャンプにテレポーテーションして、受物装置の位置決めをする。実際は受物装置も要らないんだよね、原さん」

「ええ、位置情報さえはっきりしていれば、何も要らないはずですよ。もっともその位置情報の確認が一番厄介なんですけど・・・」

翌日の11時を回った頃、賢は祐子にテレパシーを送った。祐子から直ぐに応答があった。賢は祐子に、自分に向けて念を送って欲しいと頼んだ。その祐子の念を便りに祐子の下にテレポーテーションした。祐子は事務所の空間をじっと見詰めていた。そこがぼーっとしてきたと思うと、賢が姿を現した。

「あなた、あなたなのね！」

賢はまだぼーっとしている。意識が定まるまでに2、3分掛かった。自分に意識が戻ると、賢はゆっくり目を開けた。そこには長い間ふたりきりになることのできなかつた最愛の祐子の姿があった。

「あつ、祐子・・・ここは君の事務所だな。覚えているよ」

「わたし、今、心の縛り紐も解いてもいいかしら？ ずっと押さえてきた感情をあなたに向けて逆らせてもいいかしら？」

「祐子、僕たちはもう1年前の僕たちではない。全てに対して意識が開いている。君がどんな風に感情を表現しても、僕は君の全てを受けとめることができるよ」

祐子は賢の所に駆け寄ると、いきなり賢の胸に飛び込んだ。賢は祐子の背にそっと両手を回して、軽く抱きしめた。

「祐子、おれは、ずっとお前と一緒に居たよ。何時もお前は傍に居た」

「わたしは、誘拐された頃、あなたに救いを求めていた。あなたを捜し求めていた。あまりにもいろいろなことがあったから・・・今、こうし

ていても、まだ、あなたがどこか遠いところに居る様な気がするわ」  
「俺の力が及ばなかったから、お前を苦しめてしまった……」  
「わたしは子供を産んだの。もう、昔の汚れのない祐子じゃないわ」  
「祐子は祐子だよ。君がどんな状況を生きてきても、俺にとって、君は他の誰にも代えることのできない存在だ」

「以前は、わたしは、あなたが他の女性と親しくしていると、焦燥感を感じてとても苦しかった。なんとかあなたに辿り着こうと必死だった。でも、今は違う。あなたがどんなことをしようとして、誰を好きであろうと、関係ないの。私はあなたを愛しているの。あなたという存在を……。ねえ、もっと強く抱き締めて。私もあなたと同じように、沢山の人を愛するようになったのよ。みんな大好きなのよ。だけど、あなたは別、あなたは私なの。私の中にあなたが居るのよ。今わたしを抱き締めているあなたじゃないのよ。あなたという存在なの」

賢は祐子の唇に口づけした。祐子もそれに応じた。そして再び祐子を抱き締めた。ふたりは互いに意識が融合したような感覚を覚えた。ふたりは暫くの間抱き合っていたが、やがて賢が祐子を離れた。祐子は賢から少し離れ、自分の事務机の方に歩きながら言った。

「昨日のマシンはそのままにしてあるわ。これからどうしたらいいか教えて」

賢が物質転送機に近づき状態を確認していると、事務室のドアをノックする音が聞こえた。祐子が返事をすると、アイリーンがスバハを抱いて入って来た。祐子はにっこり笑って、アイリーンに向かって頷くと、彼女に歩み寄った。スバハを抱き上げ、右手で抱えると、左手で胸を開いて左の乳房を出した。賢が側にいることがごく自然なことのよう自分の乳首をスバハに含ませた。賢はその様子をじっと見詰めていた。しかし、その姿にこの上ない喜びを感じて、身体が打ち震えてきた。スバハは心地よさそうに目を瞑って祐子の乳を飲んだ。スバハに乳を与えながら祐子がぼつりと言った。

「この子は父亡し児なのよ。私の分身」

賢は祐子の傍に近寄り、祐子が授乳している姿を見詰めていた。賢の目

から涙が流れてきた。

「あなた、どうして泣くの」

「嬉しいんだ。この子は何という名前だ？」

「スバハよ」

「君の子は僕の子供だ。とても愛おしい。自然に涙が流れる」

暫くすると祐子は授乳を終え、スバハをアイリーンに戻した。アイリーンはスバハを抱くと、賢に軽く頭を下げ、部屋から出て行った。少しして、また部屋をノックする音がした。亜希子だった。

「お姉様、おは・・・」

部屋に賢の姿を認めて、亜希子は持って来た鞆を下に落としてしまった。

「あ、あなた・・・い、いらしゃったのですか？」

「亜希子、暫くぶりだね。あれから、身体は大丈夫だったか？元気だったか？」

亜希子は何も言わずに佇んだまま、目に一杯涙を溜めた。賢は亜希子に近付くと、亜希子の頭を自分の胸に抱き寄せた。

「うううっ・・・」

亜希子はむせび泣いた。賢は黙って亜希子を抱き寄せていた。亜希子の感情が落ち着くと、祐子が言った。

「亜紀、このひと、さっき来たばかりよ。テレポーテーションで」

「お会いしたかったです・・・あなた。わたくし、この日をどれほど夢に見たか知れません。本当に夢のようですわ」

賢は亜希子の身体を離して言った。

「亜希子、祐子、よく生き抜いて来た。本当に嬉しい。俺はもう以前のように時空間に縛られずに行動できるようになった。これからは一緒に行動しよう。俺は、日本で沢山の仲間達と会社の経営を始めた。これからは君たちと一緒に人々を本来の道に戻すことに力を注いで行きたい。今回は祐子や亜希子の頼みもあったが、俺たちが世界に向けて最初の1歩を踏み出すことになる。商売と謂う意味じゃなくて、人々との繋がり」と謂う意味でだ」

祐子が頷いて言った。



「あなたも、やっと自由になったのね。私もこの日が来るのをじっと待っていたの」

それから3人はスーダンのダルフル地域にある避難民キャンプとの通信方法について話し合った。この事務所の一部の空間を切り取って、避難民キャンプ付近の秘密の場所に送りつけるという概念の説明で、物質転送ばかりでなく、あらゆる通信を全て物質転送機で行えるということ、祐子と亜希子はやっとの事で理解した。初めに受物装置をダルフルのジャングルの中に設置する作業を行わなくてはならなかった。その作業が難航することは火を見るより明らかだった。賢は何とか夕方までに設置を完了したかった。この日、キガリが快晴なので、ダルフル地方の天候次第では、今夜、受物装置が自動位置確認を実施できるようにしたかった。賢は自分がテレポーテーションするのが、最も手っ取り早いとは思っていたが、どこに向けてテレポーテーションすればよいのか分からない。亜希子もキャンプの所在地について、確証を持てなかった。「あなた、空間移動もできると言ったわね。どうかしら、位置的に確度の高い首都に一旦移動して、そこから、道路に沿ってダルフルまで行っては？」

「そうだな。それが一番確実かも知れないな」

「そうね。ホワイトナイルが確認しやすいと思うわ。ブルーナイルとの合流地点だったら、直ぐに分かるわ。そこから南下して、クスティという町から国道に沿って天空を移動したらどうかしら？空間移動のスピードはどのくらい出せるの？」

祐子が聞いた。賢は祐子の説得ある話し方に聞き惚れていて、ぼーっとしていた。

「あなた、分かった？」

「ああ、ごめん。クスティから西に行くんだな。空間移動とは言っても意識の移動だから、超高速で移動できるよ。飛行機より速く行くこともできる。だけど、クスティという町がどの辺りか分かるかな？」

「あなた、私を連れて行けないかしら？もしそれができれば、私がキャンプに残って、あなたはキャンプとこの事務所の間をテレポーテーショ

ンで往復することができるでしょう」

「うん、それはいい考えだ。前に田辺梓を連れて空間移動したことがある。祐子、やってみよう。君を連れて行くよ」

亜希子が言った。

「わたくし、テレポーテーションできますが・・・」

賢は、亜希子のことを忘れていたわけではなかったが、危険なことを亜希子とともにすることは避けたかった。

「亜希子、今回は危険を伴う行動だから、祐子と一緒に行くよ。一旦祐子をキャンプに残して、ここに戻らなくてはならないからな。亜希子だと、もし攻撃を受けたときなどの不安があって、うまくテレポーテーションできない可能性があるから、今回は我慢してここに残っていてくれ。俺はダルフルから亜希子をめがけてテレポーテーションして戻って来るから。二人の間を行ったり来たりできれば、受物装置の設置もスムーズに行えるだろう」

亜希子もしぶしぶ了解した。賢は先ず地図で、ハルツームの位置を認識し、自分の意識の中に作り上げた。それから祐子を手招きして呼ぶと、自分にしっかり捕まるように言った。賢は瞑想状態になった。そして、ハルツームに向けてテレポーテーションした。祐子は意識をはっきり目覚めさせていた。賢に抱きしめられて、自分が賢の中に溶け込んで無くなったような安らぎに似た感覚に包まれた。ふたりが現れたのは、どこかの村の家と家の間だった。賢は祐子に、自分にしっかり掴まっているように言うと、一気に天空に上昇した。500メートルほど上昇して、地上の造形を俯瞰した。祐子が言った。

「あなた、すごいわ。あなたも変わったのね・・・・・・そう、ここはハルツームの北のようだよ」

ふたりはハルツームの中心から北方に3キロほど離れた場所に居ることが分かった。

「祐子、意識を常に俺に置いておいてくれよ。決して下に見えるものに捕らわれるなよ。落ちちゃうからな」

祐子は賢にかじりつくのが、久しぶりだったので、胸が温くなる心地

よさを感じていた。祐子の案内で、賢はハルツームの上空を滑空し、あっという間にクスティの上空まで来た。祐子はそこがクスティの上空であることを直ぐに認識できた。そこからは直線道路だったので、一気にダルフル地域まで移動することができた。祐子は記憶を辿り、自分たちがつい11日前に訪問していた場所を探し出すことができた。そこは上空からは簡単には分からない場所だった。賢は祐子を抱きかかえて低空飛行した。祐子は喜んだ。

「わたし、こんなに楽しいの久しぶり。忘れていた感覚だね。本当に楽しいわ」

祐子の案内でキャンプに着くと、賢は祐子に、コンタクトすべき人間を捜してもらった。祐子は先ずパトリックの住んでいるテントを探した。パトリックは外で祐子を待っていた。

「I've been waiting for you after you have left here. Ma'am, you could come here as you have promised. I could really respect you.」

(あなたがここを去ってしまわれてから、僕はずっと待っていました。奥様、あなたは約束通り、お見えになりました。僕は本当にあなたを尊敬します)

祐子はパトリックを賢に紹介してから、5人の仲間を呼んで来るように言った。パトリックは直ぐに駆け出して行った。パトリックが仲間を全員連れて来ると、祐子は賢に全員を紹介した。賢は祐子に5人と共に受物装置をセットする場所に移動するように頼んで、直ぐに亜希子の所にテレポーテーションした。亜希子が待っていた。

「あなた、ご無事でよかったですわ。お姉様も大丈夫でしたか？」

「うん、キャンプ地に残っているよ。祐子達はいま装置を置く場所に移動しているはずだ」

「あそこは人に知られることはないと思いますが、その代わりに、野生動物が沢山いるジャングルの中ですから、お姉様達にご無事であればとお祈りいたします」

賢は受物装置と超短波発信装置を手になると、祐子の意識に向けて、一気にテレポーテーションした。

その場所はじとじとした、賢には馴染めない場所だった。賢の姿を見ると祐子が嬉しそうに言った。

「あなた、早かったのね。もう持って来たの？」

5人は突然現れた賢の姿を見ると、恐れ慄いて、地にひれ伏した。

「Everybody, I am just a common man. Don't be afraid of me.」（みなさん、私はただのありふれた男です。僕を畏れないでください）

5人はおそろおそろ顔を上げた。祐子は笑って言った。

「He is my boyfriend. He will tell you how to operate this machine now.」（彼は私の恋人よ。彼が今、あなた方にこの機械の使い方を教えます）

祐子は敢えて恋人という言い方をした。そして、そう語った自分の言葉が、これまでずっと閉じ込めておいた鹿児島記憶を呼び戻してしまった。祐子の目にうっすらと涙が浮かんだ。

賢は5人に、この機械を今夜一杯そのままこの場に放置しておくこと、そして、その間誰もこの機械を見に来てはいけないこと。明日の朝、この機械のトレイの上に荷物が届いているので、それを受け取ること。この機械の位置は決して動かさないこと。そしてこの機械に布の覆いを被せ、その上に草を被せて、誰にも気付かれないようにすること。送られてきた荷物に、次の転送予定日と時刻が記入されているので、その日時になったら、またここに取りに来ること。この場所のことは他の誰にも秘密にすること。など、ポイントとなることをかいつまんで説明した。このマシンがいずれバッテリー切れになるということは説明しなかった。それ以降はこのマシンに依存することは何もなかった。パトリックと5人の仲間は賢の説明を真剣に聞いていた。説明を終えると、祐子は自分たちが一旦キガリに戻ることを告げた。祐子は賢に抱き付き、賢は一気に亜希子の下にテレポーテーションした。

賢と祐子が抱き合った形で顕現したので、亜希子はどぎまぎした。

「お姉様！お姉様！あなた！」

亜希子の呼びかけで、ふたりは祐子の部屋に意識を戻した。

「お姉様、あなた、お帰りなさい！」

「ああ、亜紀、ただいま！」

「ただいま！亜希子、マシンのセットをしてきたよ。これから位置確認をやる」

「えっ？まだ位置が分からないのですか？」

「本体の物質転送機が認識している位置と実際に受物装置の置かれている位置の間にずれがある筈だ。そのずれが大きすぎると、送った物が目的の場所に届かない。今夜星辰の位置から、受物装置の位置を算出することになっている。それはおおよそその位置をセットして、その場所に向けて超短波発信器を送りつけ、正確な位置を検出する。昼食を済ませてから、夕方まで時間があるな」

「あなた、私たちはあの近くに居る恵まれない人達に、食料や生活に必要な物資を送る約束をしてきました。一刻も早く送ってあげたいのです。いい方法はないでしょうか？」

「時空間位置さえ分かればどうにでもなるんだが・・・」

「住所と名前はメモに書いてあります」

そう言うと亜希子はバッグから手帳を取り出して賢の前で広げて見せた。

「それは、文字の羅列に過ぎない。実体との間の繋がりが、分からないとダメなんだ。たとえば、そこに書いてある住所の一つが、実際の地球上のどこの位置なのかということだよ」

「あなたのおっしゃることは分かります」

暫く考え込んでいた祐子がふと思いついたように頭を上げて言った。

「あなたのおっしゃる空間は転送する物が無い方の空間でしょう。逆に転送される物質の領域を占める空間から覗くことができれば、位置情報は簡単に分かるんじゃないでしょうか？」

「あつ、そうか！祐子すごいな。流石は祐子だ。お前は僕や原さんより頭が柔らかいな。そうだ、空間を逆にすればいいんだ。早速、原さんに連絡して、試作してもらおう。おれはちょっと札幌に戻ってくるよ」

そう言うと、賢は瞑想状態になり、札幌の家にテレポートした。居間に顕現すると、直ぐに趣味の部屋に駆けて行った。原が物質転送機を操作

して実験を行っていた。

「賢さん、分かりましたよ。空間を逆に使えばいいんです。転送している空間に軸足を置けばいいんです。周りの空間を相対的に捉えれば、概念的に物質転送機と受物装置のトンネルができます。品物はそこを通せばいいんです」

「原さん、そうなんだ。今祐子がそのことを思い付いたんで、直ぐに原さんに伝えようと思って、戻って来たんだ」

「祐子さんは流石ですね。どうして、そんな鋭い感覚を持っているのでしょうか？僕なんかは実験を繰り返して、漸くその結論に到達したというのに」

「祐子にはそういうところがあるんだ。俺たちには分からない何かがある。その何かで祐子は困難の中を生き抜くことができた。そして、人々を助けてきた……原さん、その修正はどのくらい時間が掛かるかな？」

「そんなに掛かりません。ソフト部分の変更ですから、直ぐにできます」賢が居間に現れ、慌てて趣味の部屋の方に駆けて行っただので、声を掛ける暇もなく、急いで後を追いつけて来て、じっと様子を窺っていた梓が言った。

「あなた、どうしたのですか？」

「うん、すごい発見をしたんだ。物質転送機は受物装置が在れば何処にでも品物を送れるようになるよ。位置検出なんてしなくてもいいんだ。勿論、受物装置の無い場所に送る場合は位置情報が要るけどね」

それは晴天の霹靂だった。原はPCに向かうとすごいスピードでキーボードを叩きソフトウェアの修正を始めた。そして、1時間も掛からずに修正版のソフトウェアをキューブメモリに書き込んでしまった。そのキューブメモリをPCから取り出すと、再び物質転送機にセットした。そして、物質転送機の電源を入れた。原は居間に向かって走って行って、そこにある受物装置の電源を入れた。どうやら本体から受物装置にソフトをダウンロードしているようだった。

「試作ソフトができました。試してみますね。賢さん、僕は受物装置を持って外に出てみますから、そこから何か送ってくれますか？転送位置

情報を全てリセットして送ってください」

原が屋外に出て行くと、賢はパンダのぬいぐるみを柵から取って転送台の上に置き、原の言ったとおりに物質転送機の転送位置情報をリセットして、転送ボタンを押した。直ぐに原がぬいぐるみを持って家の中に駆け込んで来た。

「やりました。もう大丈夫です。受物装置が何処にあっても、品物を送れます」

「そのソフトはまだ試作版ですか？実際に使えますか？」

「大丈夫ですよ。これをキガリに持って行って、今僕がやったようにソフトを受物装置にダウンロードしてください。もう、翌日まで待たなくても、直ぐに品物を送ることができます。勿論夜半には物質転送機と受物装置の間で、星辰を使った位置決めを行いますから、両面でサポートできるようになります。いずれ受物装置の電池が切れるでしょうから、そうしたら、位置情報も必要になりますし」

「あっ、そうですよね。ところで、原さん、受物装置は大きすぎるんですが、小型化できませんか？」

「はい、受信ユニットだけ取り外せばいいんです。賢さんも知っているでしょう。テレビ局でデモンストレーションする前は受物装置なんて無かったんですからね。受物装置は、トンネル転送のときにだけ必要な装置なんです。操作部は携帯電話ほどの大きさです。ここに取り外し方の説明書がありますから、それを持って行ってください。その受物装置の操作部の電源を入れれば、操作部先端の手前2メートルの点を中心とした直径およそ1.5メートルの円周で囲われた空間に物質が送られることになります」

賢は説明書とキューブメモリ、そしてプラドライバーを手にとると、直ぐに祐子の事務所にテレポーテーションした。祐子と亜希子はそのま賢を待っていた。

「やったよ。これで全て大丈夫だ。祐子、救済を約束した人のアドレスと名前を書いたメモを持って、俺ともう一度スーダンに行ってくれないか？その間に亜希子は支援食料と支援物資を用意して欲しいんだ。祐子

がテレパシーで荷物の発送を頼んだら、直ぐに位置情報をリセットした状態で送って欲しいんだ」

「わたくし、機械のことは何も分かりませんが・・・」

「大丈夫、これから、先ずマシンを改良して、その後で説明するよ」

そう言うと賢はマシンにキューブメモリをセットした。物質転送機の改良を済ますと、賢は亜希子にマシンの操作方法を教え、直ぐに祐子連れでダルフルに向かった。

ダルフルの受物装置を設置した場所に顕現すると、直ぐに制御部を取り出し、それを手にして、祐子が訪れ、援助を約束した貧困な家々を廻ることにした。祐子は自分の訪れた家々の位置をよく覚えていた。賢は祐子の案内で貧民の家を1軒1軒周って行った。どの家も、祐子が去ってしまった後、少しして元の食料不足の状態に陥り、希望を失い掛けている。人々は祐子の姿を見ると、涙を流した。賢は人々にとって祐子の存在がいかに慈悲にあふれたものなのかということに改めて認識した。賢は亜希子とテレパシーで交信し、祐子の言うとおりに、それぞれの家に1週間分の食料と水を転送してもらった。人々は泣いて喜んだ。目前に品物が現れる様子を見ていて、人々はふたりの存在を怖れた。祐子の約束したすべての家々を周り終えると、ふたりは再びジャングル奥の洞窟の中の受物装置のところに戻り、制御部をセットし直した。賢は亜希子に、パンや乾パンなどの日持ちのよい食料を用意するように伝え、その場所に転送するように頼んだ。品物は直ぐに送られてきた。

「あなた、この装置はすごい装置ね。本当はとても怖い装置かもしれないわ。誰にも真似ができないようにしないと危ないわ」

「祐子、そのとおりでよ。だから、真似ることができないように、何重にもプロテクトを掛けてある」

「でも、今日周った人たちのところには、次の品物をどうやって届けたらいいかしら？」

「それが、面白いんだよ。キガリの物質転送機本体側で、彼らの場所を選択すれば、品物はそこに送られるんだ。一度品物を送ったときに、その転送先の位置情報を確定しているからね。それが物質転送機本体に記



録されているから、その場所に向けて送ればいいんだよ」

「ふうん、そうなんだ。あなた、ありがとう。これで、ダルフールの人たちを支援することができるようになったわ」

賢は受物装置を岩陰に隠し、その周囲を石で囲った。洞窟から出ると、20メートルほど先の木陰からライオンのオスが姿を現した。よく目を凝らすと、その背後にメスライオンと子ライオン3頭がうずくまっている。雄ライオンはじわじわと賢たちに近づいて来た。祐子が賢の前に歩み出た。そのとき、賢の目に輝く祐子の姿を見た。雄ライオンは1、2歩後ずさりすると、メスと子供たちを従えて、ゆっくり帰って行った。賢が祐子に向かって言った。

「祐子、何かしたのか？」

「いいえ、ただ心の中でライオンに、「ここには来てはいけない、帰きなさい」って言っただけよ」

「そんなことができるのか？」

「できるわよ。だって、あれは私たちと同じ存在でしょう。あれも仲間のように感じちゃうから、この洞窟に近づかないようにさせたのよ。パトリック達がここに来たとき、ライオンとパトリック達のどちらかが傷つく結果になるとまずいでしょう」

賢は祐子がさまざまな存在に自分の意識を伝えることができるようになっていてことに驚きを覚えた。

「祐子、これで明朝、彼らが来てもここにはいろいろな品物が揃っていることになるな。キガリに戻ってから、忙しいな」

「ええ、でもそれは大丈夫よ。ねえ、あなた、この辺りで夕日のきれいな場所を探して、ふたりで日の入りを眺めましょうか？」

「そうだな。もうだいぶ日が傾いてきたから、それはすばらしいね」

「あなた、私の心が燃えているのが分かるかしら？」

「うん、失踪事件の調査を始めたころの祐子の情熱が伝わってくる」

「ねえ、私を抱き締めてくれない？」

「もう、君の体を抱き締めてなくても、君の手に触れているだけで、意識が君と溶け合っているのを感じるよ」

「そうなのよ。私もそうなの。ねえ、夕日の見える丘の上に行きましよう。私を抱いて、飛んで！」

賢は祐子を抱き締めたが、直ぐには飛び上がらなかった。心の融合だけでは味わうことの難しい、こみ上げるような祐子への愛おしさが、細胞の一つ一つにまで伝わってきて、全身が打ち震えるのを感じた。賢が自分を抱きしめたまま、まんじりともしないのを感じながら、祐子も静かに眼を閉じて至福の中を漂った。ふたりは無言で20分ほど抱き合っていたが、やがて、賢は静かに空中に浮き上がり、空高く舞い上がった。辺りは一面の木々に覆われていて、自分たちが今までどこに居たのかもはっきり分らない。はるか上空まで上がると、西遠方にいくつかの小高い丘が見える。賢はその一番手前の丘の上に向けて滑空した。岩山だった。賢はウルルを思い出した。ウルルには登らなかった。この岩山はそのウルルの頂上と同じような荘厳さを感じさせた。賢は祐子を抱き締めながら静かに丘の頂上に降りた。陽は今将に地平線に落ちるところだった。西の空とアフリカの砂漠全体が朱色に染まっている。ふたりは入りゆく太陽に向かって、磐の上に腰掛けた。

「私はずっとあなただけを追っていた。あなたが全てだった。混沌の中に投げ込まれて、必死に生きて、気が付いたときには、全てが私になっていた。どんな存在も、私にとっては自分自身になった。分かるかしら？」

「祐子、言葉の上では分かるよ。だけど、まだ俺はそういう状態を実感できていない。まだ、そこに居る存在を愛することを意識している」

「私は、どんな人も、動物も、植物も、鉱物もみんな、自分だと感じてしまうようになったの。だけど、あなたに対してだけは違う。あなたと一緒に居ると、自分があなたの中に溶け込んでゆくを感じるわ。それはあの太陽と同じ。とっても暖かい光の海なのよ」

賢は黙って、祐子の肩を抱き締めた。祐子は賢の肩に頭を凭れ掛けた。ずっと昔に賢を頼っていた頃の自分が蘇るようだった。ふたりは沈みゆく大輪をじっと見つめていた。

日が沈んで辺りが暗くなってきてから、賢は再び祐子を抱いてキガリの祐子の事務所にテレポーテーションした。亜希子は待ちくたびれていた。

アイリーンもスバハを抱いて、亜希子とともに祐子の帰りを、首を長くして待っていた。やがて賢に抱かれた祐子が事務所の中央付近の床の上に姿を現した。ふたりはしばらくの間身動きしなかったが、やがて賢が祐子を離すと、亜希子に向かって祐子が言った。

「亜紀、ご苦労様。荷物用意するの大変だったでしょう？」

「いいえ、お姉さまこそ、大変なお仕事だったと思いますわ。わたくし、テレパシーでご連絡いただいた時、確信が持てなくて、少し不安でした。でも、賢さんに教わった通りにマシンを操作すると、用意した品物が突然消えたでしょう、本当にびっくりしました。品物は本当に届いたのですね」

賢は亜希子に向かって軽く頷いた。

「亜紀、ありがとう。君がここに居て、僕たちの意思をキャッチしてくれて、商品を適時に用意してくれたから、君たちが難民にした約束を果たすことができた。あの地区の人たちは、驚いて言葉も出ないようだった。これからは、一旦物質転送を成功した場所へは、どこへでも支援物資を送れるよ」

「本当ですか？なんとすばらしいんでしょう。これでわたくしたちはキガリに居ながらにして、ダルフルの難民を支援することができるのですね。物資の支援を行えるのですね。あなた、ありがとうございます」  
祐子はアイリーンのもとに行き、スバハを受け取った。スバハは「きゃっきゃっ」と声をあげて喜んだ。祐子は直ぐに授乳をした。スバハは思い切り母の乳に吸い付いた。

「亜紀、祐子と相談して、支援物資の転送計画を明確にしたほうがいいよ。ここに、今日訪問した難民の村と家の名称、それと受物端末の示した位置情報を一覧で書いておいた。物質転送機からひとつひとつアドレスを呼び出して、そこに対応した支援物資を送っていったらいい。それと、難民に対しては、不足しているものについて何か書き付けて、品物の現れてくるところに置いておけば、それが聞き届けられて、いつか、それが送られてくるだろうと伝えておいたよ」

「つまり、このマシンで通信もできるということですね」

「彼らにはそのようには話していない。ただ、願いを書き込むように言っただけだ。彼らには物質転送機の内容は伝えてない。そのほうがいい」  
乳を呑み終えると、スバハはすやすやと寝入ってしまった。祐子はスバハをアイリーンに渡してから言った。

「あなた、よくわかりました。後はわたしたちで運用してゆきます。あなたも忙しいのに、ここまで助けに来てくれて、ありがとう」

「ありがとうございました」

ふたりの女性が礼を言うと、賢はアイリーンの元に行き、アイリーンからスバハをそっと受け取った。スバハは気持ちよさそうに眠っている。賢はその顔をじっと見つめた。5分間ほどじっとしていたが、それからスバハをそっとアイリーンに返すと、ふたりの女性に会釈をした。

「帰るよ。また、助けが必要になったら何時でも言ってくれよ。必ず飛んで来るから。じゃ、また」

賢はそう言うと一気に札幌の家にテレポーテーションした。賢にとって、既に時空間は3次元現象界の内側に固定されたものではなくなっていた。賢が居間に戻ると、居間には明かりが点いたままだったが、人影は無かった。どうやら3人とも床に就いているようだった。賢が音を立てないようにして部屋に戻ろうとすると、廊下に通じるドアが開いて、梓が姿を現した。

「お帰りなさい。ご無事でよかった。すべて終わられましたか？」

「梓、起きていてくれたのか？ありがとうございます。すべて巧くいったよ。梓、寝よう」

「あなた、今3時ですから、明日は10時頃まで遅寝しましょうか。あなた、お部屋に行っても……」

「俺がそっちに行くよ。その方が……」

賢は一旦自分の寝室に戻ると夜着に着替えて、梓の寝室に入った。梓はすでにベッドに入っていた。賢が静かにシーツの中に潜り込むと、梓はにじり寄ってきて、賢の胸の中に頭を埋めるよう身を寄せた。これまで梓が積極的になることは滅多になかった。この日は違った。賢は梓を抱きしめた。梓は黙って大きくため息を吐いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

賢は自分の部屋のベッドで眼を覚ました。8時半だった。

居間に行くと、キッチンで梓が朝食の支度をしていた。梓は賢の姿を認めると、振り返って言った。

「あなた、もっとゆっくりお休みになっていらっしやればいいのに」

「梓、早いじゃないか」

「わたしは家に居たので、疲れていませんから」

賢が洗面所に行くと、愛子が顔を洗っていた。

「賢パパ、おはよう。本当にアフリカまで行って来たの？」

「そうだよ。ライオンもいたよ」

「ひえー、すごい。あの祐子さんの住んでいる家まで行ったの？」

「うん、もう、あの家はフルマという会社の一部のような感じになっていたよ。ライオンはスーダンのダルフルという地方のジャングルの中で出会ったんだ。祐子が心で語り掛けたら、その場を立ち去ったよ」

「祐子さんってすごい人なんですね」

「もう、動物とも意識を通じさせることができるようだよ。俺にはまだできないけど・・・」

## 諏訪

信州の用地確保は思いがけない形で進んだ。

ある日、賢に数馬から電話があった。数馬は本社を東京に移転し、社名をマトラー・システム株式会社と決めていた。

「賢、この間、長野県の来栖谷（くるすたに）という方が、俺を訪ねて来たんだ。何でも、オーラビジョンシステム（OVS）を何台か注文したいけど、特注で仕様を追加してくれないかということだった。長野の営業所に訪ねて来たようだ。最初、所長も台数がそれほど多くないので、対応を躊躇していたが、来栖谷さんが、執拗に頼むので、所長が俺に会って相談した方が良いと考えたようだ。と言うのも、その仕様は、現在のOVSに標準で取り入れても良さそうな機能だったからだ。来栖谷さんは、諏訪中郷町の町長の息子さんで、町長が村全体を、理想郷にした

いと考えて、いろいろな取り組みをしてきたとのことだった。OVSの導入は、その理想郷造りの中で考え出された方法に、OVSが役立ちそうだと判断したからだ。彼の考えでは、諏訪中郷町の住民がひとつの調和した意識になり、常に前向きに生きるようになることを目標にしているとのことだった。とは言っても、それぞれの家々が自由意思で個々に生きてゆくと、自由と自由の間の葛藤が生じる。その時、それを解決するために、相手の考えていることを知って、自分の行動を決められるとよいと、考えたわけだ。それを実現するのに、OVSを使おうって訳だ。たとえば、ある家で、毎日飼い犬が大きな声で吠えまくり、近くに住む者がその吠え声に堪えられなくなったとしよう。しかし、相手のことを考えると、そのことを口に出して言えない。まして、その家の主人に苦情を申し立てることなどできない。そういうとき、OVSでその家の主人の意識を呼び出して、相談してみるという訳だ。犬の飼い主は、悪気があるわけでは無いので、意識の中にその相談が持ち込まれると、相手のことを思い、犬の飼い方を改めることになる。また別の例だが、ある人が、自分たちの町に村の駅を造り、産物の拡販を行いたいと考えたとする。それを実現するには、通常、町議会に議題提出して、会議を重ね、決議によってそれを決める。しかし、来栖谷さんは、それでは十分じゃ無いと考えているんだ。従来のように、みんなの総意になっていなくても議会が先導して事業を決めてしまうのでなく、本当の意味での全員の総意でことを運びたいと考えたんだ。もちろん反対者もいるだろうが、その人の意見も聞き取りたいと考えたんだ。その時、OVSを使いたいと思ったようだ。もし、OVSに町内の全員に対して、同時に同じメッセージを送れば、その意識の応答を判断して、個々に話し合い、ことを進めることができると言うんだ。実際の運用では、もっと検討する必要があるけど、OVSにその機能があれば、それができると考えているようだ。OVSを使わないと、膨大な時間と、手間が掛かる。そのうちその提案も消えてしまうかも知れない。意識と意識が常に交流できる状態を実現させたいようだ。どうだ、賢、どう思う？」

「それは良い考えだ。要するに、複数の人たちに対して、同時にコミュ

ニケーションできる機能をOVSに入れて欲しいと謂うことだな」

「簡単に言うとそういうことになる」

「原さんに相談してみるよ」

賢は一旦電話を切ると、原の部屋に相談に行った。原は、暫く考えていたが、相手を特定できれば機能として盛り込むことは可能だと応えた。もし、相手が特定できないと、それは不可能に近いと言った。それぞれの人の意識は、特定の周波数を持っていて、それに同調しないと、OVSではコミュニケーションできない。もし、その周波数の意識を持つ人に対して無作為にコミュニケーションを図ると、あるひとつの傾向性を持った人たちとだけしかコミュニケーションができない。だから、ひとつの町全体に対してコミュニケーションを図るなら、町民全員の意識パターンを事前に登録しておけるような機能を追加し、同時に、ブロードキャスト機能かマルチキャスト機能を盛り込む必要があると言った。賢は原にその改造を頼めるかどうか尋ねた。原は機能自体はそれほど難しくないが、コミュニケーションのプロトコルをマルチキャストベースで構築するようにするためには、1ヶ月ほど時間が掛かると言った。賢は、原にばかり負担が掛かることを懸念したが、原は、部下を遣ってやらせれば、マルチキャスト機能の追加をすることは可能だろうと言った。こうしてOVSの第4バージョンを半年後に発売することになった。

賢はすぐに数馬にそのことを伝えた。数馬が電話で来栖谷に標準仕様として提供できる旨を伝えると、来栖谷は飛び上がって喜んだ。

「来栖谷さん、理想郷を創ることを意図されているようですが、我々の企業グループでも、理想的な世界を創ることを意図して、試行しようと考えています。現在その地域を探しているんですが、一緒にやりませんか？」

数馬は企業グループという言葉を使って、来栖谷に大企業の印象を与えようとした。そして、諏訪中郷町が、賢たちの意図していた試行サイトそのものなので、是非ともこの町を理想郷にする事業に取り組みたいと考えた。

それから1週間後、賢、梓、原の3人は数馬に案内されて諏訪中郷町を

訪問した。諏訪という名前が付いていたが、諏訪湖に面している部分はわずかで、ずっと山間の平地に広がる地域だった。賢たちは、リニア新幹線の諏訪駅を降り立った。来栖谷が町長、助役、町議会議長の3人を連れて出迎えてくれた。一行は挨拶を交わすと、来栖谷の案内で近くのそば屋で信州蕎麦を食べながら、打ち合わせるようになった。

「はるばる北海道からお越し頂いて、ありがとうございます。先ず、町長から、今回の話の内容をご説明いたします」

そう来栖谷が切り出した。

「わしが町長の来栖谷虎之助です。こんたびは遠い所をご苦労さんです。わたしはもう70になります。いろんなことをして生きてきましたので、今のこの国に欠けているのは調和だと気がついたんです。わしが死ぬ前にこの町を調和した町にしようと思ったんです。それも、トップダウンでなくて、幕面浸透という形で。そうすれば、国全体が変わってゆく、魁になると。草の根では遅すぎるし、トップダウンで進めるには、もう、政治や経済の仕組みは崩壊していますから難しいですしね。幕面浸透が一番良いと思うんですよ」

続いて、長男の来栖谷龍一郎が言った。

「町議会での取り組み事項として、御社のOVSシステムの導入を検討することにしたのですが、現在のマシンに機能を追加してもらえないか打診させて頂きました。今回はその正式回答と、今後の取り組みについて、相談させて頂きたいと考えています」

数馬が一行を代表して説明をした。

「町長さんのご計画は、大変素晴らしいご計画だと我々一同、感心しております。このたびはご子息さまの龍一郎さまから、当社にOVSのお話を頂き、我々も企業グループとして最善を尽くして、対応することになりました。本来なら、特注ということになりますので、非常に高額のマシンになってしまうところですが、内観社長の鋭意決断によって、ご要望を入れた新型のマシンを半年後に発売することにいたしました。ですから、それほど大きな投資を頂かずとも、標準品として新型のOVSをご導入頂けると考えています」



続いて賢が話した。

「諏訪中郷町の代表の皆様、皆様がこの国の将来を憂慮して、この村に日本を導く理想郷を造ることをご計画になっているという話を、ここにいる樋口社長から聞き、驚きとともに、これは何かの導きなのだと感じました。実は、私と樋口社長はつい先頃まで、日本人の意識改革を目的に掲げたプロジェクトに加わっていましたが、事情があって、そのプロジェクトから身を引かざるを得なくなりました。そして、そのプロジェクトの進めようとしていたことを、もっと現実味のある形で実現するべく計画を立案していたところなのです。そんな折に、このようなお話をいただき、夢ではないかと、我が身を疑ったほどです。我々の考えていたのは、将にあなた方のお考えになっておられる通りの、試行タウン建設なのです。これは、我々の考えと全く一致しています。我々はそこにOVSを導入することまで頭が回りませんでした。OVSの利用方法で、これほど有効なものは他に無いと思います。是非、皆様方の町の理想郷造りをお手伝いさせて頂けたらと考えています」

それから、8人は理想郷について、それぞれ自分たちのイメージしていることを語り合った。大きく異なっていたのは、諏訪中郷町の人たちが、自分たちの町をオープンで運営しようとしていたのに対して、賢たちの考えが、町を一つの閉鎖領域にして、町への出入りにゲートを設けたほうがよいと考えていることだった。しばし議論を交わしていると、諏訪中郷町の面々は賢たちの説明に納得してしまった。彼らは自分たちの町が日本の先駆けになることを強く意識し始め、物質転送機を用いての物流システム構築が町長達の心を動かす結果となったのである。幸いなことに、諏訪中郷町に通じる道は3本しかなく、その3本の道にゲートを設け、そのほかの土地には全て高さ2メートルほどの透明の塀を設けるのが良いということになった。町民全員の賛成を得られるはずはないので、どうしても反対する者たちに対しては、町からの移転を斡旋・支援することになった。目標として1年後からの実施を目指すこととした。おおよその予算は250億円と見込まれた。これだけの少額で理想郷作りがスタートできることは驚異的なことだった。当面は塀の造作と、ゲ

一トの作成に集中することになった。

驚いたことに、一人の反対者も無く計画実行の見込みが立ったことだった。それは生活が今までと何ら変わらないこと、町民の外部への出入りも、人物自動認識システムの併用で、全く意識せずに行えることがわかったためである。集中工事で塀は半年後に完成できる見通しがついた。OVSシステムは、標準システムとして販売されることになったが、洗脳マシンと揶揄されたり、現行の法律に違反しないための最大限の配慮を行うことになった。

諏訪中郷町の活動は早速、各テレビ局、新聞社にキャッチされ大々的に報道された。東領製作所をはじめ、MIプロジェクトの参画企業の心は穏やかでなかった。それが、賢の推進してきた実験サイトに酷似していたためだった。しかも諏訪中郷町をサポートしているのが、賢たちの経営する企業グループだと云うことが知れ渡ると、その反発は一層大きくなっていった。元々MIプロジェクトで賢の掲げていた実験サイトの推進に賛成していた企業も多かったのも、その企業は、MIプロジェクトの推進本部と、政府に対して、不信感を持つ結果となった。文部科学省はそれらの企業からの意見に対して、必死に弁明を繰り返さざるを得なくなっていた。

ある日、賢に文部科学省政務次官から電話が掛かった。

「内観さんですか？こちら文部科学省の枝橋ですが、そちらで進めている諏訪中郷町の町造り計画について、少々お聞きしたいことがあります、電話させて頂きました」

「はい、どのような内容でしょうか？」

「貴方も、以前はMIプロジェクトのインフラプロジェクト・リーダーだった方ですから回りくどいことは申し上げませんが、諏訪中郷町で進めている計画は、貴方がMIプロジェクトで推進していた実験サイトの計画と同じとみてよろしいのでしょうか？」

「はい、非常によく似ていると思います。当社は、諏訪中郷町のバックアップを行うことになっています」

「バックアップですか？」

「はい、プランの策定支援や、必要な機器の有償提供、そして運用の支援も行います」

「かなり入り込むんですね。計画の実施状況は公開するのですか？」

「ええ、そのようです。諏訪中郷町全体を一つのテーマパークの様にするので、外部からの入場の確認を行うゲートも設けます」  
政務次官は賢の会社が先導したのでないことを確認できたので、幾分安心したようだった。

諏訪中郷町の理想郷造りは着々と進んでいった。

1年が経過した。物質転送機の売り上げはOVSの販売を更に上回る驚異的な伸びを記録していた。初めのうち注目企業として見なしていた産業界も、その伸びの急激さにある種の驚異を感じ始めているようだった。数馬は経済新聞や経営関連の雑誌にしばしば取り上げられ、今では産業界でその名を知らない者は無いほどになっていた。数馬は経営の傍ら、講演会にも積極的に出席し、企業の孤立性を無くす努力を怠らなかった。数馬の英語力が功を奏し、海外からの講演依頼、商品の引き合いも続き、この1年間の総売上は1兆円を超えていた。あまりの急成長に、公正取引委員会が何度も査察に入ったが、数馬は少しも動ずることはなかった。オーラ・ビジョン・システム（OVS）は主として教育、エンターテイメント、メディア関連企業に導入が進んでいて、一般への売り上げと半々の割合になっていた。世界に驚異を与えたのは物質転送機だった。一旦国内で商品紹介が為されると、海外のメディアが一斉にその快挙を取り上げた。学者の間では連日物質転送機の原理についての議論が交わされていたが、どうしてもその原理を理解できずにいた。数馬の「物質転送機は物質の存在する空間を別空間と入れ替えるだけのマシンです」という説明だけが、謎解きのヒントだった。様々な理論が提示された。中には宇宙創成理論と一緒に考える学者も現れた。多様な理論的展開が試みられたが、いずれも失敗に終わっていた。

既に国内5支社、海外4支社が設立され、いずれの商品の販売もうなぎ登りになっていた。物質転送機の影響を直接受けたのは配送システムだった。一部の物流企業は廃業に追いやられた。小物商品を製造している

企業は、自社で物質転送機を導入し、独自の配送システムを構築してしまった。運送業で一番打撃を受けたのは小荷物配送業だった。郵便事業や宅配業がその経営戦略を見直さざるを得なくなってきた。それ以外の企業でも自社で物質転送機を導入するようになってきていて、設備投資の回収は法定償却を待たずに、早い所では半年後に達成された。発売当初は受物装置を用いて転送地点の物理的な位置情報を決めるのに時間が掛かっていたが、祐子と原の閃きで時空チャネルを用いるようになってから、受物装置めがけて品物を発送するだけで、品物が送り届けられるようになった。それは画期的なことだった。異動している対象に対してさえ品物を送りつけることができるようになったことで、特にその効果が顕著に表れた。航空機の中で特上サービスと銘打った上空通過地域の特別料理を乗客に提供するサービスや、遠洋漁業などの船舶に対して、日常生活に必要な品物を送りつける漁港も出てきた。マトラー・システム社には転送できる品物の大きさを大きくして欲しいという要望が連日寄せられていたが、数馬は賢と相談するまでもなく、全て断っていた。数馬の知名度が上がると同時に、学会の中では原の知名度が非常に高くなった。原はOVSと物質転送機の発明の功績によって既にノーベル物理学賞の候補に上がっていた。賢はできるだけ表面に出ないようにしていた。OVSと物質転送機の製造会社の社長として、何度もインタビューの申し入れを受けたが、その都度、副社長や担当の取締役代行させた。雑誌や、メディアの間では賢が失踪を体験しているということに気がついてはいたが、それを何か胡散臭いものという形で受け止めていた。

賢と原に対しては、外部からの不可解な接触が続いた。賢は何度か狙撃を受けた。賢はそれらの兆候を事前にキャッチし、危険を逃れていた。しかし、原は自分の身に迫る危険の予兆を感じることはできなかった。賢はそれを懸念して、原には常に2人のガードマンを付けた。原はあまり外出しなかったのも、それほど大きな危険に遭遇することは無かった。賢は梓や愛子についても間接的な攻撃を受けることを懸念して、それぞれ1名ずつの女性のガードウーマンを付けた。愛子ははじめの頃、それ

を極端にいやがったが、一度、不審な男に追跡されてからは賢の忠告を受け入れざるを得なくなった。1年間で北海道の由仁地方は賑わいのある町に変貌していた。内観システムズの工場が建ち並び、製品は全てそこから物質転送機を用いて、各支社、支店に向け、直接出荷されていた。輸送コストが掛からない上、リードタイムがほとんど無かったため、その即納性も販売に有利に作用した。

物質転送機のもう一つの大きな影響は、戦争や紛争が極端に減少したことだった。各国政府が物質転送機を導入し、防衛システムの中の重要な戦略拠点に物質転送機を設置していった。武力闘争はその意味を失いつつあった。小型の武器・弾薬は航空機に搭載して運ぶ必要がなくなった。紛争が始まると戦闘地域に必要な武器が瞬時に物質転送されるため、双方とも、相手の武器弾薬の保有状況を予測できなくなった。双方が牽制しあって、実際に攻撃を仕掛けることが少なくなった。その結果、小康状態が続き紛争自体が沈静化していったのだった。

## キガリ

祐子は賢の支援を受けて、アフリカの貧民の救済を進めていた。フルマの活動も活発化し、希土類の輸出も順調に伸びていった。フルマは輸出だけでなく、食料などの輸入も開始していた。フルマ組合によるルワンダの貧困層への支援もかなり定常化してきた。ダルフルルに対しては、支援の為にルーチンワークができあがっていた。亜希子は予てより考えていた最も困窮している難民を支援する為に、政情が不安定なコンゴに出掛けたいと祐子に相談を持ち掛けていた。祐子は亜希子の提案をなかなか受け入れなかった。それはコンゴが他国に比し、ずっと危険度が高く、難民救済の実効性が不確かなためであった。

「由宇お姉様、コンゴでは1998年から最近までに550万人以上もの人たちが、紛争や、飢えや、病などで亡くなっています。特に小さな子供達で亡くなったのはほとんど5歳以下の幼児なんです。こんな悲惨を黙って観ているわけにはいかないと思います。周辺国9カ国の内、7

カ国が紛争を体験していますから、周辺国から難民がどんどんコンゴに流れ込んで行っているようです。このルワンダからも沢山の避難民がコンゴに逃げ込んで生活していますし、その一方で、周辺国はコンゴの資源を不法採取したりしているのです。何故この国はこれほどまでに悲劇にさいなまれなくてはならないのでしょうか。そして、この国をむさぼる人々は どうして、これほどまでに貪欲で、非情なのでしょうか？」

「亜紀、わたしも随分考えたのよ。プチのキャンプのあるキヴ湖の北側は紛争の絶えない地域よ。ルワンダで大量虐殺があったでしょう。難民がコンゴに逃げ込んだので、そこにルワンダの紛争が飛び火してしまったらしいわ。もっともそれだけじゃないのよ。世界の沢山の国々がコンゴの資源を狙って、進入してきているのよ。コンゴってとっても大きな国で、世界でも8カ国が直接の軍を投入しているし、直接でなくても武器供与などで、11カ国以上がこの国に介入しているのよ。軍事的な面で、こんなにめちゃくちゃに介入を受ける国も珍しいわ。コンゴの人たちは優しい人たちみたいね。周辺国からの避難民をみんな受け入れてしまうでしょう。だから、そういう避難民に結びついた軍まで引き入れてしまうのね。悲しい話ね。亜紀の言った550万人の人たちの内、軍事的な紛争の犠牲になった人たちはどのくらいいると思う？」

「半数は紛争の犠牲者なんじゃないんですか？」

「違うわ。6パーセントほどしかないのよ。だから、30万人ほどなのね。もちろん30万人という数字は、東日本大震災で亡くなった人の数の15倍にもなる数字でしょ。それがたったの6パーセント、残りの500万人以上の人たちは、病気と、貧困で亡くなっているの。悲惨ね」

「お姉様、コンゴの人たちを助けに行きましょう」

「亜紀、わたしが何故、亜紀を止めているか分からないかしら？」

「お姉様は、わたくしの身の安全をお考えになってくださっていらっしゃるのでしょうか？」

「もちろんそれが一番大きな理由ね。最近の犠牲者の大半は貧困と、病気で亡くなっているのよ。いろいろな病気の原因となる要因を遠ざける仕組みが整っていないのよ。だから、病気に感染すると助かる確率が低

いのね。そんなところにあなたを送り出すことができると思っているの？あの恐ろしいエボラ出血熱もコンゴが発症地なのよ。エボラ川の辺から発症したようなのよ。亜紀は一度、危ない目に遭っているでしょう。あれはクリミア・コンゴ出血熱、あれもコンゴの病気。分かるわね。あなたには、もう少し、私のところに居て欲しいのよ。それから、もう一つ大きな理由があるわ。あの国の貧困な人たちを支援するのは、アフリカに沢山ある、多くの難民を抱えている国々に対する支援の様に、簡単じゃないのよ。コンゴは世界で12番目に大きな国よ。この国ルワンダの90倍も大きいよ。あの国は大きく二つに分けて考えなくてはならないの。支援が行き届く可能性のある人たちと、全く支援の届かない人たち。国土が広大でしょう。そのばらばらに、混じり合って生きている人々の中から、本当に支援を必要としている人たちを探し出すことが、至難の業なの。おまけに人々の中に様々な軍隊が駐留しているのよ。軍隊を避けて、難民だけを支援するのは至難の業よ。無作為に支援すると、支援を受けた人たちがそのために逆に被害を被る危険性もあるのよ。コンゴの人たちは一昔前まで、ベルギーやアメリカの商人に拉致され、奴隷として売買されてきたの。悲しい、悲しい運命を背負って生きてきた人たちよ。だから、先進国はコンゴを正視できないのよ。人道支援なんて言葉は、絵空事なの。自分たちが作り出した悲惨な混沌の世界を支援するなんて、胸を張って言えないの。言ったとしても、それはむなしい木霊となって響くだけよ。あの国の人たちの内の多くは未だに人種差別を行っているのだから。こういう背景的なことも含めて、コンゴの中のことをもっと詳しく調査して、実情をきちんと把握するまでは下手に支援はできないのよ。簡単に動くわけにはいかないわ。亜紀、わたしも手をこまねいているわけではないのよ。現在のコンゴの実態を調べるためにブチの兵士5人をコンゴに送っているのよ。彼らの報告を聞くと、今はまだ支援に動く時期じゃないと思うの。今は雌伏の時よ。変革の一手前で、180度の展開があるはずよ。それがこの世界なの。あの人の言う世界なのよ」

「お姉様、でも、何時になったら、わたくしたち、コンゴの人たちを助

けに行けるのかしら？」

「もう暫く待ってね。近いうちにその時期が来るわ。わたし達にはあの人の助けがあるから、支援すべき地域や支援方法がはっきりしたら、亜紀、私も一緒にコンゴに向かうわ」

「そのお言葉をうかがって、とってもうれしいです」

祐子は過去の事実も含め、既にコンゴについてはかなりの情報を得ていた。コンゴの紛争は「世界最大の紛争」と云われている。冷戦後の世界で起こった紛争の中で最も沢山の人たちが犠牲になった紛争である。550万人以上の人たちが紛争と、その影響で亡くなったと云われている。この紛争は1994年にルワンダで起きたクツ族によるブチ族の大虐殺が契機となって発生した。この時ルワンダから当時のザイール - 現在のコンゴ - に逃げ込んだ多くのクツの難民の中の反政府軍はルワンダ国内のブチ族の自衛軍とも連携していた。現在ではルワンダはフルマによって、ブチとクツの間の強調体制ができあがりこそしたが、当時はコンゴの国内に存在しているブチ族の反政府軍はザイール政府の支援を頼っていた。ルワンダ政府は、ザイールにいるルワンダ反政府軍の活動に制圧をかけた。その当時、アンゴラやウガンダ、ブルンジからも各国の反政府軍がザイールに入り込んで活動を続けていたため、3国はルワンダと手を組み、戦争に参戦した。結果はザイールの敗北に終わった。新しい政権が樹立し、国名もザイール共和国から「コンゴ民主共和国」に改名された。そして1998年アフリカ大戦と呼ばれる第二次紛争が勃発した。再びルワンダが中心となって、コンゴへの侵攻を開始した。しかしこの当時、コンゴ政府はアンゴラやジンバブエなど周辺数カ国から軍事支援を得ていたため、多くの国を巻き込んで大戦へと発展した。この戦争ではコンゴはルワンダやウガンダからの攻撃を抑えることができた。その後、膠着状態が続き2003年に包括的な和平の合意がなされた。その年に周辺国軍が撤退完了し、暫定政府が設立された。2006年には総選挙が行われ新政権が樹立した。しかし民族間の紛争や各国政府軍と反政府軍の紛争を引き込んでいるコンゴの内部では、イトゥリ州と北キヴ州を中心に地方レベルの紛争が続いた。現在もこの状態は続い



ていて、安全な地域を見いだすのが難しい。この紛争は直接軍事投入した国が8カ国、資金や武器の投入によって間接的に関与した国が11カ国以上あり、国境なき武装勢力と呼ばれる他国からの複数の反政府勢力が活動しているのが現状である。平和主義を唱えている先進国など20カ国以上の企業が紛争と関連したビジネスに関与していて、戦車や銃器、爆薬などを供給している。コンゴの紛争はアフリカ大陸の多くの国々が参戦している国際紛争なのだ。政府と政府を倒そうとする反政府勢力の「国」をめぐる紛争、部族間の抗争を持ち込んだ部族間闘争、国や政府とは関係なく、資源や権力などをめぐる武装勢力同士の戦いであるローカル紛争が渾然一体となった紛争なのだ。しかし、この紛争の人道的被害による死者540万人の内、直接軍による被害者はたった6%なのだ。残りの94%は、病気や飢えによる被害者なのである。これが祐子の心を動かす最大のポイントだった。紛争では一般市民が狙われ、その狙われた人々が逃げる場所には、食べ物や水、保健サービスなどは無い。これはあの東日本大震災と津波の災害の後の状況と同じだ。ただ、ここでは怪我や、病気、疲弊が原因となった死亡以外に、飢えによる死亡が重なっているのだ。この時代に飢えで多くの人たちの命が失われてゆくことは、祐子には絶対許せないことだった。そのうえ、いつの時代でも、どこの世界でも起きるように、地域によっては約70%以上の女性が性的暴力を受けた。祐子は多くの人間が心を失い、まだ動物的な要素に突き動かされていることを悲しく思った。ところが、豊かな生活を謳歌している先進各国は先進国だけのグループを作ってもいるかのよう、冷やかな目でこの国の紛争を斜視している。大国が直接関与している他の国の紛争に対する報道などに比べて、1/10程度の取り上げ方しかしていない。なぜ、みんな目を瞑ろうとするのだろうか？それは、この国の被害が各国の利害と関係し、その上、抗争が複雑であるためだ。日本で起きた東日本大震災は死者、行方不明を合わせて2万人ほどだが、世界各国から暖かい声援を受け、支援を受けている。コンゴに対してどれだけの支援が為されているのだろうか。声援が送られているなどという話は聞いたことも無い。人々の意識がこちらに向いていないのだ。これ

は認識力の問題でもある。

祐子は香川の話から、コンゴには他国が羨むほどの豊富な資源があることを知った。コンゴの鉱物資源と紛争は密接に関係している。たとえばパソコンやゲーム機、携帯電話などの電化製品の中にある電子回路には欠かせないタンタルコンデンサなどには、コンゴが大量に埋蔵している鉱物資源の内、スズ・タンタル・コバルトなどが使用されている。タンタルが採掘される鉱山の奪い合いが起き、紛争へと発展したようだ。タンタルやスズは石油などとは違い特別の設備が無くても誰でも簡単に、採掘することができる。そんなことで、自国の利益のためにコンゴに進入して、貴重な希土類であるコルタンの奪い合いが起きている。

祐子は亜希子とふたりで、どうやってコンゴに入るか、入った後、どのように人々を救済しようかと検討を重ねた。

「由宇お姉様、内紛が止まないキヴの周囲を避けて、先ず首都のキンシャサに入って、そこから戦闘が無く、だけど食料や物資が不足していて、多くの子供達が亡くなっている地域に移ったらどうかしら？」

「そうね、そういう方法が一番スムーズに行くかも知れないわね。でも、キンシャサは紛争地域からあまりにも離れていると思わない？もっと近くの都市に入った方が良いように思うわ。でも、亜紀その前に、もう一度コンゴのことを認識しておく必要があるわ。あの国は汚職が横行していて、政府機関が無力化しているから、いろいろな国がハゲタカのように群がって、豊富な資源を搾取しているのよ。搾取している国々は、自分たちが平和を掲げて、コンゴの国の安定を図ろうとしているような演技をしているのよ。これまで、ずっと真実にベールを掛け、政府と協力して、コンゴ国民をまるで虫けらのように扱ってきたの。ベルギーはそのなかでも、最も醜悪な行為をして来たのよ。自分の国の国土はコンゴの60分の1しかないのに、コンゴを自国の所有地の様に扱って、人々を捕らえ、奴隷として売りさばいたり、自分たちもコンゴの国民を奴隷として使ったの。コンゴの人たちは根が優しい人たちでしょう。初めの頃、そんな行為をみんな受け入れてしまったのね。結果的に、自分たちを奴隷にしてしまったの。酷かったらしいわ。言うことを聴かない

と腕を切り落としたり、拷問にかけたりしたらしいわ。アメリカには沢山の人たちが奴隷として売られたのよ。そういう背景を知っておく必要があるわ。それから、大切なことだけど、この国ルワンダも、コンゴを自国のように自由にしようとしてきたのよ。あのアフリカ大紛争はルワンダが起こしたとも言われているわ。クツによるブチの人々の大虐殺があった後、クツのジェノサイドの加害者たちがその責めを逃れるためにコンゴに逃げたのね。大虐殺の頃、沢山のブチや、クツの反対派の人たちがコンゴに逃げ込んでいたので、ルワンダの大虐殺の再現のようなことがそこで展開されたのよ。それにコンゴ政府が絡んでいたから、国際紛争の様相を呈して、大戦争に発展していったの。過去のことを責める気は無いけど、それだけのことを犯したルワンダの国から、しかも、過去のザイル政権と親密だった日本国籍を持つ私達が赴いてもすんなり受け入れてもらえるかどうか疑問なのよ。まして、あの国はレイプなどの婦女暴行が堂々に行われる国だから、これと云った後ろ盾の無い、私達のような若い女達だけで行動することは危険きわまりないのよ。人を助けるどころか、自分たちの面倒も看られず、周りの人たちに助けられるのが落ちなのよ」

「お姉様、わたくしは、このアフリカの人々の苦しみを無くす為の活動に命を賭けます」

「亜紀、あなたは偉いわ。そういう風に堂々と宣言して行動できるのだから。わたしは、ただ、突き動かされて行動するだけ」

「いいえ、お姉様は、何も口にされなくても、お姉様が行動されることで、お姉様の周りが、そしてこの世界が自然に平和になってゆきます。わたくしにはそれができないので、自分に言い聞かせて行動しなくてはならないのですわ」

「亜紀、コンゴの地理や言語についていくらかは知っているの？」

「はい、言語は250種類以上あるということです。地理的には平地、山岳地域、そして一部海にも面しているんですね」

「亜紀も真剣に調べているのね。あの国に行くには、覚悟がいると思うのよ。それも、自分は犠牲になってもいいというような甘い覚悟ではだ

めよ。「あの国の人たちを必ず救ってみせる」とか、そうね、わたしだったら、「あの国を天国にしてみせる。世界中で最も理想的な国にしてみせる」というような発展を目指したものでなくちゃだめよ」

「お姉様はすごいですわ。そのように意識して行動していらして、その意識しているとおりの結果を作り出していらっしゃるのですから」

「あの方がいつも言っていたでしょう。自分の考えるとおりの世界になるって。わたしはあの方の言う言葉に100万分の1も疑いの気持ちを持ったことはないの。亜紀もわたしと同じように思った方がいいわ」

「はい、とても、お姉様のようにあの国全体を変えるなんてふうには思えませんが、わたくしは、あの国で苦しんでいる人達を全員救い出してみせますわ。これでよろしいでしょうか？」

「まあ、いいわ。でも、もう少し強い確信を持った方が良いかもしれないわね」

## 札幌

ある朝、賢は千歳空港に数馬を送った。その帰り道、道央高速を走行しているときに狙撃を受けた。まるで大きな石でも落とされたかのように、激しい振動とともに、運転していた車のリアウインドウが、いきなり割れ、それと同時に、車が異常振動を起した。賢は必死に軌道を確保しようとしたが、その衝撃で車はハンドルを取られ、中央分離帯の欄干に激突し、そのまま欄干に車体をこすりつけるようにして100メートルほど走ってから転倒し、車体が回転して止まった。車体は原型を留めないほど酷く破壊された。賢はその日に限って、自分に掛かる身の危険を感知できなかった。自分がどこから狙撃されたのかも分からなかった。激しい警笛の音とともに、身体に強い衝撃を感じ、意識が次第に遠のいて逝った。

ふと気がつくと、大きな暗いトンネルを光に向かって上昇していた。前方は光の海である。その光の海に吸い込まれるように入っていくと、真っ白な衣服を身に着け、白髪で長い白ひげを蓄えた一人の老人が前方に立っているのに気付いた。それはムクウだった。

「賢、何を考えていたんだ？」

「いいえ、特に考えごとをしていたわけじゃありませんが・・・僕は事故を起こしてしまったんですね」

「事故じゃない。狙撃を受けたんだ。意識に隙間を作っただろう。そこを狙われたんだな」

「自分では、意識を生起させていたつもりですが・・・もしかすると、康子のことを考えていたのかも知れませんが。数馬が搭乗口に入る前に康子のことを話していましたから、そうです。彼女がアパートの部屋で自殺を図って、幸い未遂で済んだのですが、それで、彼女の心を救わなくてはと思って、その方法が閃きかけたところだったような・・・そのときすごい衝撃を受けたんです。確かに意識があの場合から放れていました。僕は死んだのですか？」

「うん、おまえもよく知っているとおおり、今、死のプロセスの入り口に立っている。この後、もう暫くすると、生命線が切れて、地上の肉体は朽ちてゆく。だが、おまえはまだ、計画していたことを全てやり遂げていない。もう一度肉体に戻りなさい。わたしがおまえの使っていた肉体に生命エネルギーを注入した。自己再生能力の及ぶ範囲まで回復しているはずだ。この後、暫くは苦しい期間が続くが、おまえなら乗り越えられるだろう」

「僕は、自分の肉体に意識を戻せば良いのですか？」

「そうだ、そしてそれを維持しなさい。しかし、暫くは、意識が肉体から遊離し易い状態が続くが、できる限り自分の肉体に戻るよう努めなさい。生きることにのみ意識を集中して、まず肉体の回復を図りなさい」

「わかりました」

賢は気が附いた。女性の声がした。

「院長、患者が蘇生しました。脈が戻りました。現在32です。酸素濃度は70パーセントです」

「酸素をレベル5に上げなさい」

「院長、脈が45に上がりました。酸素は80パーセントです」

「直ぐに手術の用意をさせなさい。わたしが執刀する。杉沢くん、わた

しの所見だ、メモをして・・・・・・右の肋骨が4本折れて、1本は肺と肝臓に突き刺さっている。心臓は大丈夫なようだが、多分全身の出血がひどいだろう。救急隊によって応急的な止血はされているが、術中の輸血が必要だ。2リットルは用意しなさい。頭部の外傷もひどい。脳挫傷で脳がどの程度やられているかは、現状では分からないが、緊急度の高い部位を調べて、その順にオペを進める。右手はほとんど千切れているが、接合できる可能性は経過時間次第だ。右足の骨折は大腿骨の単純骨折のようだが、左足は足首部分で複雑骨折しているようだ。切除する意外に方法が無いかも知れない。手術は20時間以上掛かるだろう。体力勝負になるから、10人以上のスタッフを集めなさい」

そこは札幌市立病院の救急病棟にあるICUの中だった。賢はビニールシートで囲われたベッドの上に寝かされている。医師と二人の看護婦が居て必死に自分の身体を調べ、止血や酸素吸入を行っている」

体中が痺れたように痛い。賢はわずかにできる呼吸を使ってゆっくり話した。

「先・生・・・・ありがとうございます・・・・よろしく、お願いいたします。先・生・・・・できる限り、組織は残してください・・・・」

賢はそれを言うのが精一杯だった。

「わかりました。内観さん、院長の甲田です。最善を尽くしますから、任せてください。生きようとしてくださいね」

激しい痛みと薄れ行く意識の中で、耳に自分を呼ぶ声が響いている。

「賢パパ、賢パパ、死なないで、賢パパ・・・・えーん、えーん、えーん」

「あなた、がんばって、あなた、がんばってください・・・・わたくしたちの赤ちゃんのためにも・・・・あなた・・・・えーん、えーん、えーん」

「賢さん、未だ死んではいけません。未だやらなくてはならないことがあるでしょう・・・・僕だけ置いて逝かないでください・・・・う、う、うっ・・・・ううう」

賢には3人の泣き声があった。梓に自分の子供ができたことに喜びの

感情が沸き上がってきたが、その喜びも肉体の苦痛にかき消されてしまうようだった。必死になって肉体に意識を戻すと、吐き出す息に合わせてかろうじて聞き取れるほどの声で言った。

「大丈夫だ・・・生きるから・・・」

その声は看護婦の杉沢にしか聞き取れなかった。少しして、意識は現象界にある肉体から離れた。賢は意識がICUの天井あたりであって、自分の肉体を眺めていることに気付いた。暫く泣き叫んでいる愛おしいものの達の姿を眺めていたが、やがて、賢は自分が幽界に存在していることを知った。直ぐにベッドの上の身体に戻ろうとしたが、どうしても近づけなかった。賢は少ししてからまた戻って来ようと思った。幽界はこれまで何度も体験している。どこかから自分を呼ぶ声が聞こえる。聞き覚えのある声だった。

「賢さん、あなた、助かったのですね。良かった」

「俺を呼んでいるのは誰だ？」

「私はあなたよ」

賢は由美の意識に気付いた。

「ずっとあなたの窓は閉じておいたの。でも、昨日私は身体にもものすごい衝撃を受けて、倒れてしまったの。原因がわからなかった。体中が痛くて、起き上がれなかった。でも、やっと意識が戻って、じぶんを自覚してみたら、痛みが自分自身からではなくて、あなたから来ていることがわかったの。直ぐにあなたの窓を開いてみたわ。危なかったわね。あの光の老人があなたを蘇生させてくれたのね。よかった。あなたにはまだやらなければならないことが沢山あるでしょう。いつもテレビであなたのことを観ていたけど、今度ばかりはあなたと一緒に頑張ろうって思ったの。許してね」

「許すも何も無いよ。生きられただけでも感謝しなくてはならないのに、その上、君にまで心配かけてしまって」

「私は、いつもあなたの身体の近くに居るわ。他の人からは私は見えな  
いけど、あなたには分かるはずよ。近くに居て、あなたを支えるわ」

「ありがとう。俺は意識で、大切な仲間自分が事故に遭ったことを知

らせて来るから、その間、身体を見守っていてくれるか？多分俺の意識は、暫くは自分の身体に戻れないと思うから」

「わかったわ。あなたが戻って来るまで、ずっと見守っているわ」

目の前から由美の姿が消えて、賢は魂が浮遊している状態になった。直ぐに自分に起きたことを祐子と亜希子に知らせることにした。意識を亜希子のアパートの部屋に向け、自分をそこに顕現させた。テレポーテーションとは違い、自分を顕現させるのにパイロケーションの手法を用いる必要があった。賢は周囲の有機体の物質から少しずつ原子を吸い寄せ、自分の肉体を構成し、その上に札幌の寢室のチェストにあるTシャツと半ズボンを1枚引き寄せてそれを身につけて顕現した。テレポーテーションよりずっと時間が掛かったように感じた。

「あ、あなた、どうされたのですか？」

「亜紀、祐子はフルマか？」

「いいえ、部族長会議ですわ。最近は珍しいのですよ。あまりフルマには顔を出さなくしていらっしゃるようです」

「そうか、ここにはいつ頃来るかな？」

「はい、あと2時間ほどしたら、戻っていらっしゃると思います」

「そうか、亜紀、少し話しておきたいことがあってね」

「どうかされたのですか？いつもと違って、なんとなくお元気がないように感じますが・・・」

「うん、車の事故で大怪我をしたんだ。身体は今頃手術を受けていると思う。札幌市立病院の院長先生が執刀してくださっているから、大丈夫とは思うけど、今までのような自由な身体ではなくなるだろう。そのことを伝えておこうと思ってね」

「あなた、お怪我はとても酷いのですか？」

亜希子は心配だったが、賢の無事な姿を目の当たりにしているので、取り乱すこともなく、冷静に質問した。

「病院のベッドの上に寝かされていて、そのとき先生の声が聞こえていたけど、頭と胸に怪我をしていて、足も骨折しているようだ。それと、右手もかなり酷いみたいだ」



亜希子は涙ぐむと、賢の胸に飛び込んで来た。賢は亜希子の身体を受け止めたが、何となく、自分の身体としてしっくりこない感じがする。亜希子にもそれが伝わったようだった。賢の胸から身体を離して言った。「いつもの、あなたのような感じがしませんわ。お怪我をされたあなたのお体、本当に大丈夫なのでしょうか。大丈夫ですわね。きっと、大丈夫ですわ」

賢は離れかけた亜希子の手を取って引き着け、抱きしめた。亜希子も賢の為すがままになっていた。賢は次第に亜希子の身体を感じてきた。亜希子も賢の身体のぬくもりを意識し始めたようだった。

「あなたのこのお体と、お怪我をされたお体は同じお体なのでしょうか？」

「亜紀、どう感じる？」

「初めは違うように感じていましたが、あなたの腕の中にある内に、何となく、以前と同じお体のように思えてきました」

「そうなんだ。この身体は有機物を集めて即興で造った身体だけど、意識と心が肉体全体の機関や細胞にリンクしてゆくと、俺の元の身体と同じになるはずだよ。人間の身体は意識によってその形が保たれているからね。もともと、人の身体はこの地球上の原子から造られているだろう、それを一つの特異な形にしているのがDNAで、その身体の状態を定義しているのが意識と心なんだ。それは西洋医学でも検証されているんだよ。たとえば多重人格者と判断された人間の一つの人格が糖尿病を持っていると、その人格に支配されている間は、インスリンが不足しているということが確認されたんだ。同じように別の人格の時に高血圧であっても、人格が変わるとまた正常な血圧値に戻る。極端な場合は、傷跡、疣、腫れ物など本当に物理的な形を伴った肉体的な症状が、ある特定の人格では現れ、人格が変わると消えてしまう。こういうことが確認されているんだ。これまでの西洋医学の常識じゃ考えられないようなことが起きるんだ。意識と心のあり方が身体を変えるんだ。俺の身体も、多分俺の意識の変化で俺の特性を現してきたんじゃないかな」

「そうなんですね。このお体が、あなたのお体だと思うと、なぜかうれ

しくなります。でも、もう一つのお体も心配です。このお体もおなかがすいているでしょう？あなた、由宇お姉様がお見えになる前に、お食事を一緒にさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「少し待っていてくれないか？その前に、もう一度元の身体に戻れるかどうか試してみるから。それに、できるだけ日本の自分の身体に戻って、生きていることを確かめなくてはまずいと思うからね」

亜希子が頷くと、賢は亜希子を自分から遠ざけて、ソファーに腰掛け、瞑想状態になった。やがて賢は意識を病院のベッドの上にあるらしい肉体に戻すことを試みた。直ぐにうまくいった。身体は移動ベッドでどこかに移動させられていた。手術台に乗せられているようだった。左手を誰かに握られている。その背後に由美が居るのがわかった。由美の姿は目が捉えたのではなさそうだった。じっと自分の方を見詰めているのが分かる。

「あなた、生きてください。あなた、あなたの子供がわたくしのお腹の中に居るの、あなた、生きて戻って来て、あなた、あなた……」  
か細い涙声だったが、明らかに梓の声だ。賢は、こみ上げる涙をこらえ、苦しい息を静かに吸い込んで、ゆっくり言った。

「あ……あずさ……あり……がとう……いきるよ」

賢の目の涙を観て、梓は喜びにむせび泣いた。

「先生、患者の意識が戻りました。直ぐに手術室に移動します。麻酔の霜宮先生も準備が出来たとおっしゃっていました」

看護婦の声がした。賢は梓の手を握り返した。そして、梓の夫の肉体は再び意識を失い、また幽界に入った。直ぐに由美が姿を現した。

「あなた、ずいぶん酷いお怪我をされたのですね。あの老人の力が無かったら、きっとあなたは現実界に戻って来られなかったでしょうね。私もずっと、あなたの身体にパワーを入れ続けていますが、お怪我が酷いので消耗が激しくて、現状維持がやっとです。あなたも自分の身体に戻る努力をしてくださいね」

「うん、もちろん、頑張るよ」

賢は再び幽界の時空を経て亜希子の部屋のソファーにある身体に戻っ

た。その時空は意識の作り出した世界なので、実際は即座に亜希子の部屋に戻ることができた。

賢の呼吸が整ってくると、亜希子は直ぐに夕食の準備に掛かった。パンとサラダとコーンスープそしてセラピアのフライだった。亜希子は手際よく支度を調えた。食事をしている間にも賢はできるだけ意識を手術中の肉体に戻すことを試みた。食事は淡泊な味だったが、賢にはとても暖かく感じられた。ふと、ナイフとフォークを休め、そっと瞑目したとき、すーっと手術台の上の身体に意識が移った。

賢は直ぐに自分の肉体を感じ、周囲の状況を感じ取ることができた。由美が自分の身体を見詰めている。やがて、視界に沢山の人の姿が映し出されてきた。

手術は緊迫した雰囲気の中で進められているように見えた。執刀している医師が二人、助手が一人、看護婦が6人居る。院長は自分の右胸腹部を切り開いて、もう一人の医師が頭蓋骨を切開していた。自分が手術を受けていることを自覚したとき、あれほど苦しかった痛みを何も感じないことに気付いた。医師の言葉から頭部は頭頂葉から右大脳側頭葉に掛かる部分が陥没していて、内出血しているようだと分かった。しかし、頭蓋骨を切り開きながら、医師は小さく頷いている。脳自体には損傷が無く、どうやら修復が可能なようだった。医師は一旦内出血している浅側頭静脈の損傷部分と正常な部分を閉塞紐で縛り、静脈にバイパスを設け、血管縫合後に閉塞紐を解くという、手の振えも許されない血管の修復手術を、微細彫刻の職人のような器用な手さばきで行った。血管の修復には長い時間が掛かった。出血のあった部分の清掃をして、ドリルで開けた頭蓋骨を元のように縫合するという手順で進めていた。賢は北海道にそのような神業的な手術のできる医師の居たことに驚き、また感謝した。そして、また意識が遠ざかった。由美に促されて、賢は必死に身体に戻るように意思し、何とかまた手術中の身体に戻った。どうやら輸血が始まっているようだった。右胸腹部が切開されている。看護婦が吸入器を使って腹腔内に貯まった血液を排出している。院長が肝臓部分を一部切除しているようだった。折れた第10肋骨の刺さった部分

のようだ。肝臓部分の手術を終えると、皮膚の縫合を助手に委ね、院長はリアルタイムX線撮影の映像を画面で見ながら、肺の胸腔にカテーテルを挿入した。そこから血を含んだ赤い液体が流れ出てきた。看護婦がそれを受ける容器を設置している。それから院長は賢の胸部全体に包帯を巻き始めた。賢の意識がまた遠くなった。幽界に意識が移ると、直ぐに由美が現れ、賢に何とか肉体に戻るよう促した。その結果、昏睡状態と覚醒を交互に繰り返すことになった。頭部の手術をしていた医師が頭蓋骨部の縫合を助手に任せ、右腕の治療に掛かったようだ。上腕骨の中間部分が折れて、肉が三角筋と上腕筋の接合部で切れ、尺側皮静脈も切れて、そこからかなりの出血があったようだが、救急救命隊員が腕を縛り止血をしてある。上腕動・静脈は切れずに残っていた。医師は手術を開始する前に院長から言われていた、「できる限りの組織を残してください」と言う賢の言葉が頭の中を駆け巡っていた。腕を骨折部から切除するのが最も妥当だと考えたが、もう一度詳細に状態を確認した。組織はほとんど繋がっていない状態でありながら、壊死状態になっていない。「不思議だ。よく繋がっていた。おかげで、下腕部分が活性状態を維持できているようだ」

医師は独り言を言った。下腕部分は皮膚と腱、血管だけで繋がりが、ほとんどぶら下がるようになっているが、明らかに生きていた。医師は急いで骨折部の皮膚を切り開き、先ず、骨の接合を行った。幸いまだ骨折部は元の形状を留めていて、骨の接合と金属による補強が可能だった。形状が整ってから次に血管に掛かった。医師は首を傾げている。尺側皮静脈が切れてはいたが、出血が主として静脈からだった為か、応急的な止血が為されていた為か、出血量が致死量に至るほど多くなかったように見えた。医師は先ず尺側皮静脈の接合を試みた。静脈をパイプで接続、補強し、筋肉、腱の縫合、皮膚の縫合をして切開部を閉じ、上腕を添え木で補強してから、看護婦に右腕全体に対して更にギブス補強するように指示した。院長は右胸腹部の手術を終えると、左足首を切開手術した。骨が複雑に折れていて、筋肉や皮膚、靭帯の間に入り込んでいる。院長は血を拭いながら、分散したり、靭帯にぶら下がっている骨の破片

を寄せ集めた。全部で8本あった。それらを一つずつ接合するのは時間的に難しい。それを観て賢は小声で言った。

「せ、先生、足の骨は元の・・・正常な位置に並べていただけますか・・・後はそのまま足を・・・縛ってください。自己回復力で元の形に・・・」賢は自分が話せるようになっていないことに驚いた。医師は賢の意識が戻ったことに、「ふっ」とため息をついたが、微かに耳にした言葉に少し怪訝な顔をした。医師が言った。

「院長、この人はあの有名な内観さんです。言うとおりにしてさしあげましょう」

賢は礼を言った。

「あ、ありがとう・・・ございます」

院長は余り納得がいかないようだったが、8つの骨片を元あった位置に並べ、切開部を縫合して、その後も看護婦にやらせず、自分で足全体を丁寧に、足の形が分からなくなるほど厚く包帯を巻いた。賢は左足の骨とその修復を担っている細胞群に話し掛けた。骨と随の細胞はまだ生きていた。

「細胞達よ、お互いに繋がりを取り戻し元の形に自己修復してください。ありがとうございます」

そう言った途端に急に身体全身が苦しくなってきた。それと同時に眠気が差ってきて、賢はまた意識を失った。

ふと気がつくと、食卓の椅子に掛けていた。祐子が床にしゃがみ込み、賢の腿に頭を乗せて寝入っていた。顔が涙でびしょりになっている。亜希子も賢の腰掛けている椅子の背に頭を付けて涙に濡れて寝入っていた。呼吸が整うと賢は右手で祐子の頭をそっと撫でた。

「祐子、心配掛けたな、もうじき手術が終わる」

祐子ははっとして起きた。

「あなた、助かったのですね！本当に助かったのですね！」

「たぶん大丈夫だろう。名医がふたりも掛かって手術してくれたから」亜希子も目を覚ました。

「あなた、日本はもう朝よ。18時間もかかったわ。大変な手術だった

のね」

「うん。一回死に掛けたんだ。ムクウさんに助けてもらって、もう一度娑婆に帰って来れた」

「あの、海の老人ね。どうやってあの方があなたを助けたの？」

「トンネルを抜けて、光の世界に入ろうとしたとき、その入り口に居たんだ。俺を止めて、「戻れ」って言った。ムクウさんが死に掛けている俺の身体にエネルギーを充填してくれたようだ。しかし、危険なことに変わりはない。俺の肉体は、今必死に自己修復を行っているはずだ。出来るだけ早く、肉体に戻って共に回復に励まなくてはならない。意識と心がここにあっては、肉体の統率ができない。ゆ、祐子、亜希子ありがとう。俺は絶対生き抜くから、心配するな」

「あなた、本当よ。本当に生き抜くのよ。生き抜いて、お願いだから……」

「賢さん、あなた、わたくしはあなたの元に参ります。あなたが回復するまで、お側を離れません。お姉様、許してください」

「亜紀、そう、そうしてあげて。あなたが一緒なら、この人も心強いわ」祐子はじっと堪えた。

「ありがとう、亜紀。もう少し待って、俺の意識が安定して自分の身体に収まっていられるようになったら来てくれ。今はまだ……またすぐ連絡するから……じゃ、戻るよ」

賢は立ち上がると、ふたりから離れて壁の前に立った。瞑想して自分を幽界に移動させた。どうやって仮の肉体を消し去れば良いのか分からなかったが、意識の照準を手術台の上の肉体に合わせると、さっきまで働いていた肉体は霧のごとく消えて去ってしまった。

「奥さん、手術は成功しました。後は本人の生きようとする気力次第でしょう。もう、大丈夫です」

「先生、ありがとうございます、ありがとうございます。ありがとうございます、先生」

目を真っ赤に泣き腫らせて、梓は手術室から姿を現したふたりの医師の元に駆け寄り、何度も何度も頭を下げた。賢の身体が運び出されて来た。

全身に布が掛けられている。梓、愛子、原の3人は移動寝台に駆け寄った。看護婦が両手で押して搬送している移動ベッドに、寄り沿って歩きながら梓が言った。

「あなた、もう大丈夫よ。よく頑張ったわ。もう大丈夫よ、あなた・・・」

「賢パパ、よかった。先生が成功だって。良かった、良かった」

原は黙って歩いた。

「皆さん、少し離れてください。これから無菌室に向かいます。そこでまた会えますよ」

看護婦に言われて、3人は移動ベッドから離れ、直ぐに無菌室に向かった。

賢は自分の身体を上空から見詰めていた。まだ身体にうまく入り込むことができない。

無菌室の中にはガラス張りの看護室が6部屋あり、面会者は患者とガラス窓越しで対面するようになっていた。窓の脇にスピーカーが埋め込まれているらしく、看護婦がスイッチを入れれば中の声を聞き取ることができる。しかし、通常は無菌室の中の声は外まで聞こえない。賢は手術台に乗せられたまま無菌室に入れられた。看護婦が白い布切れを取り除けてくれた。賢は全身に包帯が巻き付けられていて、まるで倒れた雪だるまだった。左手と顔だけが外に出ている。看護婦が賢のベッドを定位置に設置して周囲を確認しているとき、賢は漸く自分の肉体に戻ることができた。まだ身体が痺れたようだ。全く感覚が無い。3度呼吸をしてから、静かに目を開いてみた。看護婦が両足をつり紐で上部に張り巡らされたポールに吊りあげていた。足の固定を終えると、右手もベッドサイドのガイドポールに固定された。賢が口を開いた。

「看護婦さん、ありがとうございます」

「あら、内観さん、気が付いたのね。全身麻酔なのに、もう目が覚めたの？もうじき先生が回診に見えます。先生から、手術の結果をお聞きになってね。見事な手術でしたよ。もう大丈夫ですよ」

「徹夜で手術して頂き、本当にありがとうございます」

「暫くすると、多分3時間くらいでしょうけど、身体感覚が戻ってき

ます。詳しくは先生からお聞きになってくださいね」

覗き窓の外から梓が心配そうに覗き込んでいる。賢は左手をあげて合図しようとした。しかし、思うように身体が動かない。賢はあきらめて、梓に向かって言った。

「あずさ、ありがとう」

賢の声は外に届いているようだった。梓の目から大きな涙のしずくがこぼれ出て、頬を伝わって流れ落ちた。

「あなた、助かったのよ。ほら、赤ちゃんも喜んでいる」

梓はまだ、全く目立たない自分の腹部を見詰めて言った。

「賢パパ、がんばったね。早く良くなってね」

「賢さん、手術は成功ですね。良かった。後は賢さんの意識で身体を回復させてゆくだけです。僕は待っています」

梓の両側に愛子と原が居るのが見えた。そして、3人の背後に大勢の人垣が出来ている。ざわざわと声が聞こえてきた。とその時、人垣をかき分けるようにして、手術を行った院長と脳神経外科の医師が無菌室に入ってきた。賢の顔を覗き込むようにして院長が言った。

「内観さん、よく耐えました。長い手術によく耐えましたね。もう、後は回復を待つだけです。左足はあなたのおっしゃるとおりに処置しましたよ」

「先生、ありがとうございます。先生のおかげで生き返ることができました。先生、徹夜なさって、手術してくださったんですね」

「そう、こんな手術は滅多にありませんよ。半分どうなるかと思っていました。出血が想定したより少なかったようです。術中の輸血も2回で済みました。あなたは生命力がありますね。あれだけの傷を負ったら、普通の人なら、助からなかったでしょう。まるで、誰かがあなたを守っていてくれたような気がしてきます」

「先生、私は一度死に掛けました。でも、まだ死んではならなかったようです」

院長は軽く頷いてから賢の左手を取り、脈を診た。賢は目を瞑った。

「辻林先生、何かありますか？」



「はい・・・内観さん、頭部は右側が損傷していて、静脈が切れて出血してしまいましたので、静脈のバイパス手術をしました。手術は成功したと思います。でも、縫合手術箇所からの出血を防がなくてはなりませんから、今日いっぱい、頭部はあまり動かさないでください」

賢はそっと目を開けて、目で相槌を打った。辻林は院長に向かって言った。

「院長、私はこの人の言葉が気に掛かっているんです。頭部は医師として最善を尽くしましたが、左足の複雑骨折はただ骨を並べただけです。あれだけダメージを受けた組織が、よく壊死せずに持ち堪えていたという驚きと、自分で回復するという言葉が、私に重くのし掛かってきます」

「確かに、内観さんは常識から逸脱したものの捉え方をしているようですが、でも、足の単純骨折の場合にも、骨を元の位置に戻して、シーネ（添え木）に挟んで縛り付けるでしょう。あれなんか、彼の言っていることを実地に行っているとも言えるでしょう。私は、現代医学はその点も見抜いているんだと考えています」

「確かに院長のおっしゃる通りかも知れませんが、私の左足に対する施術はただ骨を並べただけで、きちんと勘合させたわけではないんです」

「それはあの時間で、全てをきちんと勘合するのは無理ですから・・・とにかく辻林先生、日次の経過観察をしましょう」

「はい、院長」

賢は朦朧とした意識の中で、ふたりの医師の話を黙って聞いていた。そして、自分の肉体の全ての細胞の動きを客観視した。細胞は活動を活性化させてきていて、元の組織を再生しようと必死になっているのがはっきりわかる。賢は軽く2度頷いた。うっすらと目を開けると、ふたりの医師の姿は無かった。看護婦も居なくなっている。どうやら自分が眠りに落ちてしまったようだと思った。もう窓の外には梓、愛子、原の姿も無かった。休息を取っているのだと思った。賢は亜希子にもう来ても大丈夫だと連絡しようと思ったが、よく見ると、既に亜希子がベッドサイドに蹲っている。亜希子の目からは涙が溢れていた。

「亜紀、来てくれたのか？」

「あなた、目が覚めましたか？辛いでしょう。がんばってください」

「まだ、麻酔が効いているから、大丈夫だよ。みんなのおかげで命は救われた。亜紀と由宇が俺を勇気づけてくれのおかげで、この状況を乗り越えられそうだ」

賢がふと窓の外を見ると、そこには4、5人の人たちが覗き込むように賢を覗いていた。ガラス越しに何か話している。どうやら看護婦が退室するとき、マイクのスイッチを切ったようだ。賢は天耳を開いた。

「確かに、あの東海地震のレスキュー隊の人だ。だけど、なまら酷い怪我をしたもんだ。この人もこわいだろうな」

「それはそうだ。テレビで全身に傷を受けて、危篤状態だって言ってたけど、あんだけ包帯巻いてちゃ、ゆるくないな。助かるだか」

入院中の患者が興味半分で覗き込んでいるらしい。

「看護婦さん、無菌室なのに人が中に入ってます」

女性の甲高い声が聞こえた。聞き覚えのある声だ。しかし姿は見えない。

「看護婦さん、あの女を外に出してください。患者に悪い影響を及ぼします」

康子だった。看護婦が駆け付けて来た。無菌室の中に入ると、亜希子に向かって言った。

「済みません、ここは無菌室ですから、直ぐに外に出てください」

亜希子は看護婦の声ではっとした。

「申し訳ありませんでした、わたくし気がつきませんでした」

「どうやって入室したんですか？鍵が掛かっていたでしょう？」

亜希子は応えられなかった。ただ黙って下を向いていた。看護婦は語調を強めて言った。

「直ぐに出てください」

亜希子が下を向きながら退出すると、看護婦は一通り賢の様子を窺ってから退室し、部屋に鍵を掛けてからドアノブを回して施錠の確認をした。

「あなた、内観部長の家に居た、あきさんでしょう？どうして、ここに居るのよ？」

看護婦が去ると康子はやや挑戦的な口調で言った。

「……はい……賢さんが怪我をしたとかがって、飛んで来たのです」

康子は、亜希子を睨みつけるようにしてから、無菌室の窓際に寄り、賢を覗き込んだ。唇をかみしめてじっと見詰めている。賢は康子に気が附いた。左手を少し挙げてみた。少し挙がる。康子に向けてそっと手を振った。看護婦がマイクのスイッチを入れた。みるみる康子の目に涙が溢れてきた。

「内観部長……賢さん……」

「康子、身体は何ともないのか？数馬に、君が絶望的な状態になっているって聴いて、心配していたんだ」

「私、内観部長と一緒に居たいだけです……」

「康子、いつも一緒に居るじゃないか。僕はこの世界に、しかも同じときに生まれただけで、奇跡的なことなんだ。いつも同じ空の下に一緒に居られるんだから。死んだ後じゃ、もうどこに居るのか探しようもなくなってしまうことがほとんどなんだよ。同じ意識のレベルにある人としか一緒に居られないんだ。この世界ではたかだか70億人かそこらの人としか一緒に居られないだろう、だから東京と札幌なんて、もう目の前と同じだよ」

「でも、私、いつも賢さんのお側に居たいんです……」

賢は、これ以上言っても無駄だと思った。疲労を感じてきて、再び目を閉じてしまった。意識が遠のいてゆく。由美が現れた。

「あなた、この女性はあなたのことを愛しているようですが、私にはその愛が純愛より、情に近いように感じます。それと、よくわからないのですが、何か変な戦慄のような感覚を覚えます。このままにしておいてはいけないと思います」

「俺が事故に遭った日の少し前、自殺を図ったらしいんだ。何とかしてあげたいんだが、俺の話すことの意味を理解できないようだ」

「普通の人には、あなたの考えは難しすぎます。何か実例を示して、指導してあげた方がいいと思いますけど」

「うん、そうしてみるよ」

「それより、あなた、肉体に戻らなくても大丈夫ですか？」

「大丈夫だろう。今睡眠を取っているところだ。身体に特に危険な状態は感じない。君も疲れただろう。少し休んだ方がいいよ」

「あなたはいつも優しいのね。私のことなんて気にしないでね。今世、あなたには沢山の大切な人たちが出来ているでしょ。あなたがその方々に愛情を向けると、私は、自分も同時にその愛情を受け取っているような意識になるの。だから、いつもあなたと一緒に居られて、とても幸せなのよ」

「由美の意識はあれからずっと、俺と一体になっているんだな。だけど、日常の生活をしているとき、何か不自由に感じないか？」

「普段は思考で生きているから大丈夫よ。あなたとは意識で繋がっているから、安心していられるの。私ね、最近ある男性からプロポーズされたのよ。とても優しくて、男らしい人なの。結婚してもいいと思っているわ」

「そうか、それはよかった。由美には今世は安定した人生を生きてほしいんだ」

「私はもう、生きる目的を達成したのよ。長かったわ。だから、あとは普通の人生を生きてゆくわ」

「今世は、自分の殻の残骸を取り除いて、できたら、自我を無くして、社会の中に溶け込んで、あらゆるものを慈しんで生きてゆけよ。そうすれば、もう由美は生まれ変わることもなくなるだろう」

「ええ、もうその必要も無いように思うわ。過去にあった心の渴望も消えてしまったし、私は愛に満たされているし、最近は自分の前に現れるあらゆる出来事をそのまま自然に受け入れて、自然に対して畏敬の念を抱いて生きているわ……」

「人間が生きてゆく上で理想的な姿だね。だけど、決して沸き上がる感動を失ってはいけないよ。全ては与えられているけど、何も分かっていないから、全てを新鮮な心で受け止めてゆくんだよ」

「ありがとう。あなたと一緒に生きられて本当に幸せです」

「じゃ、俺はまた自分の身体に戻るよ。自分の身体の中で休むことにするよ」

賢は再び自分の肉体に戻った。どのくらい時間が経っていたのだろうか、また、周囲には誰の姿も無い。全身に激しい痛みが走っている。その痛みをそのまま受けていると、また、意識が遠のいて逝きそうになる。賢は痛みの元になっている筋肉細胞達と神経系を辿ってみた。激痛を発しているのは頭部だ。賢は手術の行われた頭頂葉から右大脳側頭葉に掛かる部分を内視してみた。その一帯の組織が人工血管の存在に対して対峙しているのがわかる。既に自己修復プロセスが働き始め、異物であるバイパス血管に対して必死に攻撃を掛けているようだった。その細胞達の必死の攻撃が痛みの原因のようだった。賢は細胞達に語り掛けた。

「側頭部の細胞達よ、そこにあるのは私たち全体を生かすために、前側頭枝の機能を復活させてくれた人工血管だ。受け入れてくれ。君たちの構造とは異なるが、単純に血液のバイパスを補助するという役割を演じてくれている。協調的に受け入れてくれ」

次第に細胞達が人工血管に対して協調的な対応をしてくるのがわかった。それと同時に側頭部の激痛は治まり、苦痛の主体がその他の部分に移った。賢は苦痛を発している部分を内視して、臓器細胞、神経細胞、筋肉細胞達に語り掛けていった。賢の語り掛けと受容で、全身の苦しみは我慢できるレベルにまでなってきた。

そのとき、賢はふと、傍らに人の気配を感じた。うっすらと目を開けてみると、看護婦の手術着を着込んだ亜希子が再びベッドの脇に両手で膝を抱えて蹲っていた。今度は窓の外から死角になる位置を選んで、隠れるようにして居るらしい。賢は唇の動きを読まれないように、亜希子の意識に話しかけた。

「亜紀、また来てくれたのか？」

亜希子は気が付かない。下を向いたまま寝入っていた。スカートの膝あたりが涙で濡れている。

「亜紀、疲れただろう？」

亜希子は漸く気が付いた。

「あ、あなた、お気づきになられたのですね」

「うん、幽界と肉体を行ったり来たりしていた。もう、肉体に戻って来れそうだ」

「あなたは、待つようにおっしゃいましたが、やはり来てしまいました」

「亜紀……その服は……どうしたんだ？」

「婦長さんに借りました。ここは無菌室とのことですから、お医者様が手術の前になさる滅菌処理を施して頂きました」

「婦長さんが？」

「婦長さんの指導霊と守護霊とおっしゃる方々をお願いしました。少し説得に時間が掛かりましたが……」

「それはおもしろい……そんなことができるんだ」

「あなた、今、お話ししていても大丈夫ですか？」

「うん、痛みはだいぶ引いてきた」

「よかったわ。痛みが引いてきて。あの一、わたくし、ずいぶん霊界の方々とお話ししてきたでしょう。あるとき、わたくしがキガリのジェノサイド・メモリアルで幽界におられる亡くなられた方とお話ししているとき、いつも誰かにわたくし達、亡くなられた方とわたくし — のことを見詰められていることに気付いたのです。わたくし達を見詰めている意識は幽界の中からではなくて、別の世界から来ているようでした。わたくしはその存在を確かめようと思い、その視線を投げ掛けている存在達に意識を集中してみたのです。そうしたら、その方達は亡くなられた方と共通の魂をお持ちの分離した意識だと謂うことがわかったのです。その方達は霊界におられる方々のようで、幽界にまで降りて来られないようでした。この現象世界では、その人達のことを守護霊とか指導霊とか呼んでいるようです。わたくしはこのフロアの看護婦長さんを見付けて、その意識とコンタクトを取り、そして、一旦霊界に戻って、そこで婦長さんの守護霊さまと指導霊さまにお会いして、お願いしたのです。わたくしが滅菌処理をして頂いているときの婦長さんのご様子は、とても楽しかったですわ。まるで、わたくしがこれから手術を執刀するかのような処理をしてくださいました。そして、手術時に身に着ける衣

類に着替えさせてくださったのです。どうかしら、あなた、このお洋服似合うかしら？」

亜希子は立ち上がって両手を広げた。賢はその姿がとても神聖に感じられた。そのとき、また外に人だかりができた。賢が天耳を働かせると、外のざわめきが伝わってきた。誰かが叫んでいる。康子だ。

「看護婦さん、また、あの女が無菌室に入っています」

看護婦達のなかから婦長とおぼしき女性が進み出て康子に言った。

「あの方なら、大丈夫です。さっき滅菌処理を致しましたから」

看護婦達が婦長の方を伺ったが、婦長は軽く会釈をしてその場から立ち去って行った。看護婦達も、何事も無かったかのように、婦長の後を追った。

康子は心穏やかでない。

「ねえ、だれか、あの女を引っ張り出してください」

誰も康子の叫びに応じず、いそいそと自分達の病室に戻って行った。いつしか野次馬の姿も消えて、康子一人が取り残された。康子は、亜希子を睨み付けている。亜希子は目を伏せて、ベッドの脇に蹲った。康子は声を上げて泣き出した。そして、その場にしゃがみ込んでしまった。賢が亜希子に言った。

「亜紀、守護霊や指導霊に会うのにはどうしたらいいんだろう？できれば俺が康子の守護霊か指導霊に会って、相談してみたいと思うんだ」

「あなた、わたくしが行って参ります。普通はこちらで会おうという意識を強く持って霊界に入りますと、あちらの方から現れてくださるようです。でも、幽界に彷徨っているときは、守護霊さまも指導霊さまもよほどのことがない限り、降りてきてくださいません。どうやら、そのこと自体が危険なようですから、幽界を避けて、霊界に入る必要があります。でも、それは強靱な生命線を維持した状態でやる必要があると思いますから、今のあなたには危険過ぎます。わたくしが行って参ります。わたくしは康子さんのことは詳しくは分かりませんが、どのような方なのでしょうかね？」

「俺が転勤になったとき、札幌支店に勤務していた人だ。孤独な人だ。」

幼い頃にご両親を亡くされている。それでも気丈に生きてきた。あのよう  
に美しい人だ。札幌の美人コンテストで入賞している。いろいろな人  
に失望し、人を信じられなくなっていた頃、俺と出会い、俺のことをと  
ても愛してくれるようになった。しかし、俺が彼女だけでなく、このよ  
うに、あらゆる人を愛しているので、それに耐えられないようなんだ。  
康子の守護霊に会えたら、康子のカルマと心の傾向性について訊いて来  
てほしい。それと、康子が過去世で、どんなとき穏やかな心を取り戻せ  
たかもな」

「分かりました。やってみますわ」

そう言うと、亜希子は瞑想状態になり、やがて次第に姿が消えていった。  
少しして、婦長がやってきた。

「内観さん、先ほどの女性の方はどなたですか？どうしてもあなたの近  
くに居たいので、滅菌処理をしてほしいと私に頼みました。私も、なぜ  
か分かりませんが、あの方は信用できると感じたので、手術のときに執  
刀される先生に対して行うのと同じ処理をしてあげたのですよ。もう帰  
ってしまわれたのですか？それと、外に一人の女性が居て、興奮したり、  
落ち込んだりしていますが、あの方はどなたですか？」

「私の近くに居た女性は、私の親友です。今、少し外に出ています。窓  
の外にいる女性も友達です。あの女性は私の負傷のこともあって、今、  
精神的に少し不安定になっているようです。労ってあげたいのです  
が・・・こちらに呼んで頂けませんか？」

「いいえ、それはできません。精神的に不安定な女性にあなたの近くに  
来て頂くわけにはいきません」

「せめて、声が聞こえるようにして頂けませんか？」

「いいでしょう。10分ほど会話できる状態にします。でも、疲れない  
ようにしてくださいね」

婦長はマイクのスイッチを入れて、部屋を出て行った。賢は優しく康子  
に話しかけた。

「康子、そこに居るのか？顔を見せてくれないか？」

返事が無い。



「康子、駆けつけてくれてありがとう。君にまだ、お礼も言ってなかったね。君は僕の近くに居た亜希子のことを気にしているようだが、彼女は以前、高校生の頃、下校途中で誘拐され掛かったとき助けてやったことがあるんだ。それからずっと、俺のことを探し続けていて、最近偶然出会えたんだ。彼女は俺の大切な親友だよ」

康子の姿が窓の外に現れた。立ち上がったようだ。もう泣いていない。

「あの人と、私とどっちが大切ですか？それと、田辺部長と私とはどちらが大事ですか？あなたは嘘つきです。みんな好きだなんて、そんなの身勝手としか言いようがないです」

「すまない。これが俺なんだ。こんな俺のことは忘れてくれた方が、君は楽になるかも知れないよ」

「私もできたらそうしたいのです。忘れようと努力しました。忘れるためにいろいろなことをしてみました。でも忘れようとすればするほど、内観部長のことが頭から離れなくなるのです。ですから……」

そのとき、看護婦に付き従って梓がやってきた。窓際に寄って中を覗き込むようにしている康子に向かい梓が言った。

「あら、雪坂さん来てくださったのですか？主人も喜ぶと思います」  
この言葉を耳にすると、康子はキッととなった。

「ご主人ですか？田辺部長、内観部長といつご結婚なさったのですか？ちっとも知りませんでした」

挑戦的な口調で話す康子に対して、梓は微笑みながら、静かに応えた。

「式は挙げていませんが、私のお腹の中にはこの人の子供がいます」

「う、嘘でしょう。それに、まだ内観部長の子供と決まったわけじゃありませんし」

「いいえ、この人の子供です。雪坂さん、女なら分かるでしょう」

梓は看護婦に促されて、雪坂に軽く会釈をすると、看護婦の指示に従って、備え付けの消毒薬で手を殺菌し、マスクを着けて無菌室に入った。

「看護婦さん、ちょっと待ってください。どうして、私はだめで、田辺部長は入室可能なのでしょうか？ねえ、看護婦さん！」

看護婦は、梓が無菌室に入ると、知らんぷりをしてそのまま立ち去った。

部屋に入ると梓は賢の左側に回り、賢の唯一自由にできる左手をそっと取って握った。

「あなた、目が覚めましたか？大分お休みになられたようですね。手術は成功したのですから、後はあなたの快復力次第だそうです。でも大丈夫ですよ。いつも私が側に附いていますから、頑張ってくださいね。何か、必要なものはありますか？」

賢は梓が窓とベッドの間の狭い空間に入り込んで来たので、康子のことが気になったが、梓の手を軽く握り替えして言った。

「梓、ありがとう」

「内観部長、私帰ります。早く治ってください……」

マイクのスイッチがONのままになっていた。雪坂はそう言い残すと、小走りで逃げるようにエレベータの方に向かって立ち去った。

「雪坂さん、どうしたのかしら、ずいぶん厳しい顔をしていましたけど」

「気持ちが不安定になっているようだ。俺が悪いんだ。もっとはっきりした態度で突き放してあげなかったから、逆に彼女を傷つけてしまったようだ」

「あなたには、突き放すなんてことはできないわ。私も、雪坂さんのように葛藤に苦しんだこともあったのですから。そうは言っても、今でも、あなたが他の人に優しくすると、心が乱れてしまいます。女はそういう風にできているんじゃないかしら」

「身体を休めることはできたのか？昨日は徹夜したのだろう？」

「ええ、今3時間ほど休みましたから、大丈夫です。それより、あなた、もう麻酔が切れて、痛みが戻って来ているのではないですか？」

「うん、かなりね。だけど細胞達と話をして、手術のときに身体に入った異物を受け入れてもらうように頼んだら、それからは痛みも我慢できるレベルになってきたよ」

「そうですか。あなたらしいですね。先生のお話では、最低でも1ヶ月は掛かるとのことです。休養のつもりでゆっくり休んでくださいね」

「ありがとう」

梓は賢の左手を自分の頬に当てて、微笑んだ。

亜希子は幽界を通り抜けて、霊界に入った。辺り一面花が咲き競っている。意識を康子の守護霊、指導霊に向けて佇んでいると、遠方から背の高い一人の男性がこちらに向けて近付いて来た。男性は直ぐに亜希子の目の前までやってきた。康子に似た美形の男性だ。

「僕をお呼びになりましたか？」

「あなたは、どなたでしょう。わたくしは亜紀と申します」

「あなたが私を呼んだのでしょうか。私はあなたに呼ばれたから、こちらに来たのです。康子の守護を担当している者です。康子がどうかしたのでしょうか？」

「あなたは、雪坂康子さんの守護霊さんですね。指導霊さんはいらっしゃらないのですか？」

「康子には今世は指導霊は附いていません。そういう条件で出生しています。この魂は、今世は特に過去のカルマの克服の為の体験をすることと、波立つ心が安定になることにだけ集中することになっています。僕はそれを見守るだけです。多分何度か危険な状況には遭遇するでしょうから、そのときは救いの手を差し伸べるつもりですが」

「あなたは康子さんが正しい道に進むように道案内をしておあげにならないのですか？康子さんも、あなたの魂のお仲間ではないのですか？」

「ご存じないですか？正しい道というのは無いのです。ただ道があるだけです。僕だって、康子が危険な目に遭わないように、導いてはいます。でも、康子の意識がぼくの誘導を拒絶します。時々インスピレーションを与えているのですが、いつも全く無視されてしまいます。亜紀さん、あなたはまだ現世に生きておいででしょう。でしたら、康子の心が安定し、人の心を受け入れるように指導して頂けませんか？」

「わたくしはわたくしの恋人から頼まれてあなたに会いに来たのです。康子さんはわたくしの恋人を愛しています。ただ、彼が多くの人を愛するのが許せないようなのです。その結果、康子さんの心は不安定になり、自殺を図ったりしたようなのです。その不安定な心を癒してあげたくて、康子さんが今までどんなカルマを背負ってきているのか、どういう傾向

性が強いのか、また、それらのカルマを克服するのに何かよい知恵はないか、これまで、どんなときに康子さんの心が穏やかになったのか、尋ねて来るように彼は申しておりました。康子さんについて教えて頂けますか？」

「ご存じのことと思いますが、カルマはその本人が受け入れて、それを超えなくては解決しない因果応報のようなものです。ですから、康子のカルマを知ってもどうすることもできないと思いますが……確かに康子には強い自我があり、それが原因で、自分の望むことを達成させるために、人に対してずいぶん酷い仕打ちをしてしまうという傾向があります。過去世でも、何度か人を傷つけていますし、その結果自分も酷く傷ついてきました。相手の中に自分の意識と合わない部分を観ると、その人を許せなくなったり、あるいは攻撃的になったりする傾向があるのです。でも悪い面ばかりではありません。そのような魂の傾向性故に、本当に愛する人と結ばれると、その愛の深さはとても大きくなり、周囲のものに対してもその愛が広がってゆくという特性を持っています。康子の場合は、その強すぎる自我の部分をどのように落としてゆくかが課題だと思います。今世では人に愛されていることを自覚させるために、逆に両親や親族からの愛を絶って、孤独になる環境を与え、自ら沢山の人に対して愛の念を広げる機会が得られる条件の下に生まれ出ています。その素養はあるので、後は心の安定性を得さえすれば、自我の空しさにも気付くことと思います。過去世で何度か、康子は純粋に愛されたとき、あらゆる心の澱を解消させて、完全に癒されたことがあります。一途で純粋な性格ですから、カルマが解消されたら、すばらしい人生を生きることができる魂だと思います。僕も早くその日が来ればよいと思って待っています」

亜希子は康子の守護霊に礼を述べて賢の元に戻ることにした。自分の向かう道筋を透視してみた。賢の側に梓がいるのが見える。亜希子は人影の無いエレベータの前に顕現した。亜希子が直ぐに賢の元に行くべきか否か躊躇していると、エレベータが開いて原と愛子が降りて来た。

「あっ、亜希子さん！ どうしてここに居るのですか？」

愛子が叫んだ。

「こんにちは、お久しぶりです。お元気でしたか？」

原はきわめて冷静である。

「テレポーテーションですか？でも、どうしてこの場所が分かったの？」

「賢さんから聴きました」

「賢さんがキガリまで行ったのですね」

原が言った。愛子は驚いたように原の方を見た。3人は一緒に賢の無菌室の前まで来ると、窓から中を覗き込んだ。梓が賢の手を握って、自分の頬に押し当てている。

「あなた、私たちの赤ちゃん、あなたに似ているとかわいいでしょうね」  
マイクを通して梓の声が聞こえてくる。

「梓、君にはずいぶん苦勞を掛けるな」

「私はあなたと一緒に生活していただけるだけで幸せです。苦勞なんて感じたことは一度もありません」

それは、愛し合い睦み合う夫婦の会話だった。亜希子は唇を噛みしめた。

「う、うん、うん」

愛子が咳払いをした。梓はその音に気付いて、後ろを振り返った。窓の外に愛子と原の姿が見えた。

「あら、愛子さん、原さん、来てらしたの？」

「うん、亜希子さんも・・・」

愛子が振り返って見たが亜希子の姿は無かった。

「亜希子が帰ってきたのか？」

賢が言うと、愛子が応えた。

「今、エレベータのところで会ったんだけど・・・」

「ええ確かにいました」

原も相槌を打った。しかし、亜希子の姿は無かった。賢は、亜希子が梓の言葉を耳にして、身を引いたのだということを直ぐに察した。

亜希子は同じフロアにある売店で手紙セットを買ってから、コミュニケーションルームに移動した。そこで、先ほど康子の守護霊に聴いた話を便箋に書き付け、封筒に入れてそれを看護婦に渡した。亜希子は賢の眠

るのを待った。賢は暫く3人と会話をしてから、疲労を感じ、眠りに落ちた。眠りの中で亜希子の意識に語りかけた。

「亜紀、済まない。君が近付きにくい状況になってしまった。許してくれ」

「いいえ、あなた、わたくし達はアフリカに居るのです。当然です。ご心配にならないでください。康子さんの守護霊さんから聴いたお話はメモに書いて看護婦さんをお願いしました。後でごらんになってください」  
亜希子はそのままキガリのアパートに戻った。

閑散とした部屋は、昼の日差しが窓際から差し込み、むっとするようなむさ苦しさを感じた。亜希子は祐子に電話を掛けた。

「お姉様、ごめんなさい。お仕事中でしたか？」

「あら、亜紀、もう戻って来たの？あの人はどうだった？」

「はい、手術は成功しました。お医者様のお話ですと、後はあのひとの生きようとする意思がどれほど強いかにかかっているとのこと。絶対大丈夫だと思いますわ」

「よかった。安心したわ。亜紀、今アパートなの？」

「はい、お姉様」

「直ぐにそっちに行くわ。あの人の様子、もっと詳しく聞かせてね。一緒に食事をしながらね」

「はい、お姉様、お待ちしています」